

波の上をゆく心して磯近く。なりよけらしな松の音こゆ
つぎの日はなくなりしとぞ

文學補

鈴録の。徂徠先生。一年風たちて。書物ことごとく土藏へ入れおかれたる冬の事なる。軍書少むかり出だして見られたる時。出来こじまりしとなり

言語

○水の行方の跋。南條山人姓川名。名孟。林助と稱す。云。身の長九尺三寸。用ひらるゝは足れり。自誇れど。陸尺も頭こづれながくて。三千年の月日をむなしく送りたる。平原屋が三尺の喙を鼓しても。賣懸もとれぬ。横一寐たがる世の中を。帳箱の陰は避けて書きちらしたる。反古をみれば。亦問屋仲間の隱居所の腰張ももならんかし

言語

○下谷ある萬年山祝言寺の。徂徠翁の縁ある寺なり。翁の家よつかへし老婆ありて。いひける。祝言寺の談義。參詣多し。此方の會讀の日は。来るもの少しといひければ。先生微笑して。かうく具いものよ。蛇がたかる事多しとの給ひしと。堀口幽谷の物語なり

俳調補

或人の云。今江戸。元三大師の畫像をおしたるよて。思ひ出だせり。かの芭蕉の句。角大師井手の蛙のひばしかな

方正補

滑稽の中。少し雅なる意あり。されども。あまり耳よなれざるめづらしき句なり。水谷琢元の。安永。天明の比の人なり。碁を以て鳴る。門人と一日局を對す。其席平らかならぬ。よりに門人碁石を取りて。盤の足の下に置く。琢元これを見て。忿然としていやく。子碁を以て業とせ。まかるよなんぞ其器をかるくしくするやとて。つひは排斥せしとぞ

巧藝

○熊澤了分息海子と號し。二郡八と稱す。云。笙の舌よて調子定り。弦も笙を聞きてあらべ。箏箏も笙を聞きて舌をあらぶるなり。笛むかりあらぶる事なく。笙。箏。箏をきつて。それ應じて吹くものなり。こと一弦一管の吹きよくし。調子さとからで。弦もあらすして和せざるものなり。笛よければ。面白きものなり

巧藝

○又云。ゆい左の手なり。丸とり十のゆる故よとりゆといふ。時。丸十なり。然れども。丸もとりにてゆい。十のすくひてゆるなり。此曲を後世に。左の手のしなとのみ心得て。古人の心傳をうしなひたりとみえたり

樓逸補

本阿彌光悅了庵院晩年洛北鷹が峯よ一寺を建立して。光悅寺と號せり。其子光瑛。その子光甫に至りて。代々鷹が峯を監護せり。能書の譽ありといへども。筆跡は名のみよて志

をいそぎ。後鷹が峯に蟄して。牛は炭薪を負かせ。京の一家中。又の心やすき方へうり。鷹が峯へ蟄居する前。家財もよき道具。悉く一門あるひに入魂のかたへ送り。鹿物なる器まで。茶をたのしまれぬ。よき道具。そこなひするななど氣づかひよして面白からず。とかく損ひ破れても。くるしからぬぞ樂みなりといこれしとまん

排調

銅脈先生留中頼母と稱せ。聖徳院宮に仕へ奉る 庚申のとし。中風として危かりしかば。やんごとなき御方。すてよ死せしと聞しめして

傳聞先生道脈揚 定是閻魔成敗場
繼衝赤窟欺青鬼 魂魄猶迷極道傍

和韻 銅脈

墨蹟手麻商賣揚 死生素是任相場
生兮死兮斯面倒 學仙長欲盡阿傍
翌るとし。享和元年辛酉。つひようせぬ。銅脈の著き所の狂詩。太平樂。勢多唐巴詩など。人口は膾炙せり

補文學

君情字は君情。通名才藏。亂海と號せ。書を太宰に愛く 云。春臺は物をさひむる事すきなり。人の會釋よも。はじめて逢ひし時より。これに此位の會釋よすべき人といふ格を定めおかるゝなり。書を読むより。朝早く起きて。まづ國字の書などを見。又人のみせおきたる詩文をよみ。又校正の書を見。また會業の下見などを見。いろくせらるゝゆゑ。倦みつかると事なし。夜はかならむ四時。寐られたりとなり。其言行きはめてをりつめて。實義なる事。北宋の人物。司馬溫公。范文正公など似たりとなり。行狀書よ及ぶよと。かく小學の嘉言善行よ入るべき人のやうに覺ゆるとなり

言語

○無腸翁上田餘齋。又休西と號せ。京師の人 いらく。むかし男。友たちかいつらねて。住吉の郡。すみよしの郷の住吉の社に詣でけり。霜月のこじめ比まで。夕さり方の空はほつかなう霜がれて。海吹く風の鹽じみて。いと寒し。いこま山を見れば。西へ入る日の影ぞ。所々赤瓦てあいなうあらなり。今宮村を北へ横をれ来れば。長町の南がしらなり。むつかしげなる家ども。ひしひしと立ちならびたる中。はたごやど所得がほながら。時をらねば。田舎人の宿れるもまねくまで。火おこさぬ夏のすびつのと打ちなめて過ぐる青物くだ物あきなふ家。よし養たてかこひて。たげね薪ばかり。炭をれこれと賑はし。鹽魚何やかや。まいら目黒の切賣。ほど綱のいき。か皿は盛りたる。又何とかいふ魚のあぶり物。まびれ大魚。いまそん

げは切りさいなみたるよ。にまんのまた、かげは煮こまらせし。たうさび餅。あかむじの
切目だかなるよも。大路の土風やかづくらん。香の物。くま漬のよほひ。花やかなる中よ。
芋むす湯烟どあた、げなる。日、西に沈み、て。風いと、あらく吹きたちあつごえて着
たるさへ。夕じゆり身よまみておぼゆ。此あたりよやどりとする。あさましげなるもの
ら立ちつゞき。歸りくるをみれば。老いさらばへる目くらの。竹杖の片手。十一二なるわ
らべよひかせて。ゆく、うちたふるべくあゆみくるしくす。此あたりよて。米を呼ばね
ど。聲をしあげば聞きしりたらんものぞ。垢じみたる物よ面おしつゝみたる。うづらの手
は蕪菜二かぶばかりく、りさげて。物えたり顔よゆくもあり。あざり法師のかしら髪お
どろよおひのびて。つゝれの肩のひまより。氷れる肌のあらわれたるが。何事やらん獨ご
としつゝあざりゆく。けふの寒さをかこつなるべし。とやく宿とれる。二錢が鹽。二錢
が餅。これかれもとめありく。此あまなふ家も。こゝは年月住みふりたる。さるものらも
いぶせういやしめを。是めすか。それぞよかめるなど。こゝろよげなり。下。此翁あるやん
ことなき御方よ。無腸と名つきたる心をよみて奉れるうた

津の國のなよよつけてよくまる。芦間の蟹の横はしる身

豪爽

○蘆橋菴いづく。浪花五人男の馬金屋文七。阿波座堀太郎助橋の近所なり。こくい専右
衛門も同所よて。藪横町といふ所よすめる。極印鍛冶よて。今その跡紺屋となれり。雷庄九
郎の正直なるものよて。時として怒りはらたつ事あり。故に喧嘩大將と異名せり。西横堀
大佛屋六兵衛といへる。三十石船の間屋の船頭なり。馬金文七の奉納したる繪馬。天王寺
の元三大師堂よありしが。享和の炎上の免かれしを。惜むべしたれ人か取りゆきてみえ
む。五人男の法號。立髪五人男といふ書よ見えたり

品藻

南郭の謝安よ似たる人なり。喜怒色よあらなきを。人よ構はむ。我ものむきを立てられし
人なりと。子式の評なり。君脩云。日本近來の學者。皆酒量あり。仁齋の其中下戸なり。東涯
も上戸なり。闇齋淺見重次郎も上戸なり。祖采の下戸。南郭。春臺も上戸なり

文學

○村井椿壽字大年。翠山と
號也。長崎の人ある人周公旦待旦といひしかば。左丘明喪明とこたへしと。浪花
よありし時。馬田昌調學醫師をよくも。
長崎の人あり物がたれり

文學

○源氏若紫の巻よ。まかのたゝをみありくもめづらしくといふよ。なやましさもまざれ
はてぬと書きしを。諸注よ春鹿をいふ事めづらしとのみありて。杜計の春山無伴獨相求
といふ。次の句。速害朝看麋鹿遊といふ句よ。こゝろつかざりしといふならん

品藻補

子式本姓高野。名は維賢。字は子式。源平と號す。東都の人。云。君脩十三歳の時。東都より來りて。先子式より謁す。其時十三經をど一周覽し。大抵古書をよくよみて。大學致知格物の說なども議論ありて。經義の中々人よゆづらむと。古人を排撃して。甚才よほこれり。誠は神童なれども。あの才氣增長せば。自負よ過きて。いかなる人よなるべきや。大かたはあしき人よなるべきと思ひたる。春臺とい。子允かねて心やすきゆゑ。頼み入り申さんとありしかば。尤然るべしといひて。春臺の門人よなられたるが。春臺のさびしき人よ逢ひたる故か。今に至りて才氣よき仁よなり。見事の人物よなり。いかよも人品よき君子よなられたりと。子式くりかへし譽められたり。子式又云。春臺の門人。才も不才も人品おとをしき事なり。是春臺の手柄といへり。

豪爽

○江戸にて初鯉をめぐづる事。此條五代記よみゆ。天文六年の夏。小田原浦近く。釣舟おほくうかびたるを。此よし氏綱聞し召し。小舟よめされ。海士のまわざを御見物。珍事の御遊。盃酒よ興じ給ふ所。鯉ひとつ御舟へ飛び入りたり。氏綱喜悅よ思しめし。勝負よかつをと御祝詞なぐめならむ。此時酒肴よ用ひらる。然るよ同じき七月上旬。上杉五郎朝定武州へ發向のよし。告げ來る。同十五日の夜軍。氏綱討ち勝ちて。武州を治め給ひぬ。諸侍

任説補

戰場の門出の酒肴。鯉を専ら用ひ侍りぬとあり。靈山の長彌子木下氏。名の勝俊。若狭藤よ任して。天徳翁と號す。短檠の歌として。をしむ日もや。くれ竹のともし火。よるの玉づき猶てらせとや。

文學

竹檠の前。此うたありしなり。○揚名分。三ヶの大事とやらよて。つれづれ草よも。事むつかしくありしが。これの孝經よ揚名の章あり。揚名の高名といふ事なるべし。此比の人。孝經よ熟せし事。日蓮御書よも。孝と申まの高行なりとあり。太平記などよも。をりくこの經の文をひけるを見るべし。

品藻補

此御國。文雅の盛なりし。寶永。正徳の間なり。享保の中比より。文雅草莽よ下たり。有職の士。是を前知せるよや。赤石蛭岩先生の詩。登高作賦今誰是。海内文章落布衣と。俊述先見の明恐るべきよあらむや。民間よばかり文あらば。文表なり。無位無官の者。詩文作る。蟲草間よ吟むるなり。それさへ近年傑出の者なし。枯草の虫。霜枯の音といふべしと。ある人申しき。

簡傲補

○三宅石菴萬年と號す。京の學問の師の人なり。の學問。俗間よ禰學問といへり。其言よいやく。頭の朱子。尾の陽

補 豪典

明。其鳴聲仁齋に似たり。象山のあたりをかけたまると。香川太沖の語なり。東涯先生の子夭死の時。門人數輩。楯前を侍り。時。天台家の沙門一人来り。吊ひ禮をいりて。門人よむかひて言ひていらく。かゝる哀哭の時。無常輪廻の道も。諸君もつともと爲ざることを得んや。諸人みなことばなし。木村源之進答へて云。何さまかゝる時。魔も引き入れられさうと思われ侍ると。かの沙門黙然として席をたちしとなり。源之進。江州の人にて。多年東涯に隨侍し。後。儒を以て紀州に官せり。羅山先生名の信勝。字の道春。夕顔巷と號す。石川丈山翁のもとへとふらひ給ひし時

韶明 欲見月 采登文選樓

丈山も紫じられしかども。對句つひよ出てざりしとぞ

○宇津宮由的三進子と號す。岩國吉川家臣。京師の書生の戯語。風先生といひし。多く頭書を著し。故なり

假 語

○川名林助名の孟隆。字の仲裕。南條山人房州の人。徂米翁の書きしものを金谷よこひしかば。人々の求め多くして。みだりよあたへがたし。虫干の日。不用なるを出たし置くべき間。采て盗むべしとぞ。こえしかば。一紙を得たり。贈道本禪師詩を書きさし給へるなり。林助高野山に隠れんと

て。出でし時。予よ贈れり

補 言語

關取谷風棍之助。小角力を供まつれ。日本橋本船町を通りける時。鯉をかんとしける。價いと高かりければ。供のものよいひつけて。まけよといかせて。行き過ぎしを。魚うるを。こよびとめて。關取のまけるといふ。いむべき事なりといひければ。谷風立ちかへり。買へ〜といひてかかせたるもまかりき。これら谷風のまくるよあらむ。魚うるを。この方をまけさす事なれば。さのみ忌むべきことよあらざるを。か〜といひし。ちとせまこみしと見えたり。是の予が若かりし時。まのあたり見たる事をりき

賞 譽

○古今の事を附會して。時代違ひのはなしをなすを。青特イナクといふ。これら龜成といへる俳諧の點者。別號を青特といふ。此もの、工夫なりとぞ。ある諸侯これをめして。此語を一番まこしめされて。これをも藝と覺えて。一生を送るに不便の事なりとの給ひしを。龜成大に悦びて。一生の規模なりといひしとぞ。墓の牛じま弘福寺にあり

補 品 藻

京都の人の諺。宇野三平名の三平。明徳軒と號す。が病者を治せると。谷左仲名の左仲。子辨。文章をかけると。此三を見たる人なしといへり。三平は多病と困學とよよりて。實は閉戸先生の稱あり。太沖は治療をもよくせり。然れども。多くの痼疾沈

病は治を求むる故。扁鵲倉公が術よても。いかんともまがたき事あり。ゆゑに此名を得たり。左仲の詩集ならびに論語の玉振録などを著せり。爾雅の癖有りて。字訓に刻意せる人に見ゆ。もと東涯の門人にて。阿波の産なりといへり。

言語

○其碩云。五島酒の酔のかりや吾不醉やせぬとくりごといふと。藪賢者の手がら咄しと。駕籠かきのきのふの旦那さま事と。淨瑠璃かたりの一口かたつて白湯のむとは。癖か餘情か。庭鳥の時うたふとき。羽たゞさまると同じ格よや。

補豪爽

仁齋先生存在の時。大高清助といふ人。適從録を著して。大に先生を誹議す。門人彼書を持ち来て示し。且これが辨駁を作らん事を勧む。先生微笑してことむをなし。かの門人怒りつぶやきていふ。もし先生辨ぜざんば。され其任よあたらんと。先生まづか言ひていらく。彼是ならん。吾非を改めて。かれが是よまたがふべし。もし我是よ彼非ならん。我是は即天下の公共なり。固より辨をまたす。久しうしてかれも又みづからその非を去らん。汝只みづからをさめよ。佗をかへりみる事をかれとぞ。先生の度量。大旨此たぐひなりと。ある人かたりき。

雅量

○雪中巻太といへる俳諧師の。横山町よまめり。明和九年二月の江戸大火よ。樂鐘よ白

湯をいれて。文臺ひとつを持ちて。深川の六間堀要津寺の中の巻へのがれて

緋櫻をよまされて青き柳のな

といふ發句をなし。火車羽織着て。見まひよ采し人よ句をよびて。百韻をみて。夜をあかしくとぞ。此巻太かつて。酒一とくりを携へて。まが牛込のやどりをとひし時

高き名の響の四方よまきいで。赤らくくと子供までしる

といへる。されうたを添へたりき

補簡傲

肥州は水足平之允といへるありき。即祖采文集よ所謂。西肥の水秀才是なり。十六歳にて。祖采先生へ書簡をよせて。經義を問ふ。誠よ奇童なり。ある時。肥州は歸る人あり。祖采翁千鱗の華山の記を出たしていらく。汝これを携へ歸りて。秀才よ示し。訓點句讀を付けさせよ。もし立どころは事をなさば。其賞として。吾かた耳をそぎて秀才よあたへんとぞ。其人歸りて。秀才よしめし。且傳ふるよ。祖采翁の言を以てす。秀才これを見て。即坐し訓點句讀をくへたり。翌年その人また江戸よゆきて。先生よ謁し。契約のごとく。かた耳を給へといふ。先生掌をうちて。嘆じていしく。真よ神童あり。若これを讀む事を得ざんば。かた耳をもあたふべけれども。これを苦もなくよむほどの神童なれば。あがかた耳をあ

補任談

たふるよ及ばずとて。笑ひてやみしとなん
金蘭齋の。羽州秋田の産にして。鴨三竹といひし人の子なり。幼少にして京師に遊學し。

つひに京に教授す。名に忠祐福菴と號す。金氏の母方の族なりといへり。辭世よ
東山の花見しも此春をかざりか西山の月みるもこのゆふべかざりかさても死よ
ともない事ぢや

補賞譽

杉本望一は。勢州山田の人にて。俳諧をよくま。望一臨終の遺書とて。山田中村忠太夫家よ
藏也。その筆のこびなかく。盲人の書と見えむ。また小俣何がしの君の家よ。短冊一
葉あり。是また其筆意盲人の手跡とい。かつて見えむとなん

言語

○一升樽と。百の錢よ手を付くるとそのまゝみなよなる事とやし。あてがひ世帯の米薪
と。風吹きよ蠟燭たてると。春の日よあふ軒の雪と。元日から十五日までの日。とやく立
ちて。あそぶ日のみなよなる事。毎年我人あそびたらず。光陰よちがひなけれど。あがこ
ころよ好ぬ事する時。同じ日を長くおぼえ。ころよすきぬるあそびよ。もう入相の
鐘がなるかとしみぬと。其頌が諭草よ見えたり

補豪爽

勢州よ小澤詢五といへる士あり。家世農を業とま。詢五よ至りて。いとけなきより學をこ

尤悔

のみ。寛延三年庚午京よありて。古義堂よ寓ま。七月大雷あり。四十餘所よ落震す。其夜古
幾堂よ寄宿の門人。數輩みな樓より下りて。一室よ密坐して。大よ驚怖を。詢五一人は通宵
書を樓上よ讀みて。神色閑正なり。伊藤東所つねよこれを以て。美談とせらる。其後江戸よ
ある事數年。病よよりて郷に歸り。いくむくもなくして没せり。その死日。子弟をよびて永
訣し。且詩を賦し。弟成美をして筆受せしむ。其詩よ

十年蹤跡偏中州。伏枕歸家過暮秋。他日人如問遺稿。絶無一紙一風流

書き終るをみて。其まゝ絶え入りしとぞ。誠よ惜しむべし

○堀越菜陽ニ三は。狂言の作よ老いたるものなり。一とせ森田座の顔みせの名題よ

柏木衣紋坂

梅津掃部宿

梅津掃部宿

といへる。柏木梅津の對聯の詩の名對といふべし。此年明和八吉原よ火災ありて。普請も

出来し比なれば。葺き替へてといへるなり。且葺き替へといふも。狂言の詞なり。菜陽かつ
て作れる狂言の名題よ。其名月色人といふあり。この狂言よりして。菜陽が作おころへた
りといふ。羽衣の譚の文句よよりしなれども。その名も盡ぬるといへる。職語よべ。いま月

もよし原といふ。祝ひ直せしころなるべし。今狂言の藪壘といふ道具立。此人の工夫なりといふ

方正補

垂加翁名の流。字の敬義。嘉右衛門と稱す。其門人を接し。少しのあやまちといへどもゆるさず。一日鴉飼金平

諸人と翁の座ありしが。翁講談の時。金平をさみをもてあそびつゝ爪をさる。翁これを見て。聲を勵して。師席よて爪をさる。何の禮ぞと。金平おそれおのゝく。其席有りあふ人々も。色をうしなへりとぞ

賢媛補

文月淺間記。上野高崎羽鳥氏の女子撰まるところ。天寶は才を生じて。才古今はなし。宋人のたれふれの説。いづゆる遊杭機雲没して後。天才子を生ぜし事虚語はあらむ。此書のごとき。真正の才子。未曾有の書と。播磨清詢これを賞して。其序はかけり

言語

○其碩云。男女のしめやかよそなにする。そなしの品のまこえねど。ころゆかしくいやならぬものあり。芝居見物して居る。どこともなう伽羅の香のまると。松風はつれて色糸のせて。女のほそぐと花車は歌うたふ聲のまこゆる。心うきたち。あぢな氣なるを思へば。誠は三味線と蛸の血を狂らす物ぞかし

雅量補

伊藤仁齋先生。別は棠隱と號する事。世の人の知るところあり。又櫻隱と號する事あり

古學先生和歌集。菴室の前は櫻を植ゑ侍りし。年をへて花の盛なりければ

世の中をいとふとなしよかのづから。櫻が本のかくれ家の庭

文學

○諸分店印。一名浪花鉦として。西鶴翁の作といへども。これの後は外題をかへたる。て。實は翁の作とい見えむ。其中は

二字論

小太夫

大臣小太夫といひく。せけんよけいせいかなふ。すいじやぐわちじやといふ事。むかしから人ごとよいへども。あけのみこみがたし。まゝたいの小太夫わたくしもまかたまらぬ事ながら。こゝもとていふ事がござんす。あらまし申しましょ。まづすいといふ字は。水といふ字をかきます。ぐわちの月といふ字でござるさうな。なぜといふよ。けいせいを水よたとへ。をとこを月よたとへます。とのたちのすいよならしやるといふ。けいもじよもまれのちよ。なることとでござる。まだまよしんをぐわちといふさうよ。ござる。せけんよまよしんなる人を。山だしといひます。そのごとく。をとこのをじめて女郎くるひよかゝる。山だしの月でござんす。その月がけいせいのおやれた水ようつりまして。けいせいのことろのそこをじりて。西へおつるといふ心で。ぐわちのこうまよなつたをすいと

いふでござんす。中略すいぐわちのけいせいのかたよりいふたこととござんすあいのをいふんかねつかうてすいよならしやんせ。おかし

按。水月ものいなしの書名さこれば。ぐわちもなかりけりの文句此文よてあきらかなり

補汰侈

半時巻談々の。従来江戸の産よして。京都六波羅よ寓居す。俳諧を以て鳴る。羅人竿秋の其門人なり。しかれども。羅人の擯斥して。貞徳正流よ歸を。談々後居を浪花ようつして。生涯京の水を飲み。敢て浪花の水をのまむ。その騎侈これらよてみるべし

巧藝

○祖仙森氏。名守泉。崎陽の人。浪花よすめり。猿をうつして。畫名一時よ雷同を。世よ祖仙の猿と稱して。渴望するもの多し。其はじめ崎陽よ在る日。獵者よ託して。一猿を買ひ得たり。これを庭樹よつなぎ置きて。そのかたのらよありて。猿の趣を寫す事。數篇よして。つひよ絹よ淨寫し。米船の某氏の鑿を乞ふ。某氏のいづく。惜むべし。此猿の人家の養育の形よて。山中自在のおもむきよあらむといわれければ。猶また山中よ入り。切磋する事兩三年。終よ其真圖を得たりと

補量雅

名の實よかなへる。大雅堂なるべし。駟僧ウマイの風。輕薄の習。つゆばかりもなし。此翁の事

實奇稱すべきを詳よせば。棟牛よも至るべし。かつて語りていづく。われ若かりし時。馬術をならふ。其師のいづく。そこもと武士よあらむして。騎馬の術學び得ても益なし。されど旅遊をとせられ。足つかれなば。からしり馬よもまたがるべし。落つる術をならむべし。怪我すべしと。われこれを是とし學ぶ。所謂からしり乗かけ二賢荒神三賢くのう神なるまで。ことづくその落ちかたを習ひえて。危難をのがれし事。度々ありしと。又いづく。かつて和歌よあそびて行脚せし比。やどをとりのうしなひ。すてよ夜よ入る。一寺へゆきて。書牘を投じて宿をこひしよ。寺僧許さざれば。とある所の竹林の中よ入りて。跌坐して。曉をまつよ。夜もまがら何やらんかたのらよて。がさくよとせしが。夜あけてみれば。養よも笠よも小蛇いくすちも集り居たりといへり。又債を人よ贖ふ事。甚正しく。債を人よ求むる事。甚疎よしてかつゆるし。これ尋常異人といゆるもの。真似よて及ばざる所なるべし。わかかりし時。二條樋口よ居を。畫扇并よ石印を彫刻する事を業とせ。債をもとむるの簿帳を纂書す。一とせ旅行して。臘月よ及べども。家よかへらむ。老母一族など集り。世よいふ書出しなる物を調んとする。正文といひ。ことよ纂書なれば。さらよよめを。龜屋太助といふものを頼みて。やうくよそのなかばをとりのへきとぞ。他日一族ど

雅量

も。此事をいまいじめたれば、是より後、篆書をやめて楷書す。譬へば中等扇三柄、其先生携歸、估直既済とか。或は未済とか書す。これをみて、老母及び一族の理會せざる所ぞ。いんやこれを篆書せしをや。大雅が書畫の逸品に入るべし。畢竟一黙の俗惡の氣なし。

○平澤常富云。我十三四五の比なるべし。存義小網町より深川一の鳥居の北側越えて住す。父と共に行きし事あり。又黙取の懐紙の即黙のため。我ばかりゆきたる事もあり。此卷の紀文が衰てのち住みける所なりと聞きて。少年の時なから。まこと心をつけて見たる。かはりたる事もなかりし。天井の一枚紙をたゞやたらに亂りよかきねて張りたるやうに覺えし。其後三十年計り後。存義がをなしたるとして。晩得が物がたりける。かの一の鳥居の住宅の。天井やぶれそこねて。見にくければ。いかやうにも繕ひてよと。門人の中一經師のありければ。頼みける。かの經師損じたる所を委しく見て。横手をうちて感じていひける。此天井もとのごとく繕はん。甚難儀なり。紙の色いろく。少しづつかりて。みゆれど。皆同じ白紙にて。糊の色々の糊にて張りたるなり。百年に及ぶ糊あり。五十年。或は十年経たるも有るべし。今かく百年を経る糊もちたるものなし。奇なり。とて。かんじたりとなん。世よのさまぐか。るはなしも有ることながら。信じが

巧藝補

たき事歟。紀文より。わざとちもしろき時も聞き侍りき。

三熊思孝名正親京師鴨瀧村の人にして。専ら好みて櫻花の寫生をなす。終一その真を得たり。或人これをもとめて。裝潢し。壁上に掛けおきたれば。常に蝶きたりて。これに舞ひ狂ひけりとなり。然らば寫花といへども。真に逼る時。自然の香あるかも知らむ。女を海棠といふ。これも畫をよくせり。

德行

○賢厝の末。淺草寺のほとりありがた坊と異名をとりし僧有りけり。本名の樂心といへり。この僧もとよりつんぼうとしておふしなりければ。自性院といへる地藏堂の。常念佛の役を抱へられけり。結衆仲間にて。件のかたをあなどり。夜の勤番のみあてけり。樂心の苦も思ふ。元よりものいふ事もならねば。終夜鐘をならして。あゝあゝとのみいひてつとめけり。ある夜。丑の刻ともおぼしき比。地藏尊御聲高く。樂心々々と呼び給ふ。樂心をじめて。耳に入りあいと答へ。又舌もまれば。有りがたうござりますといふ。これよりもいそれ。耳もきこえて。今のよのつねの人。異ならむ。唯ことむのあとさき。有りがたうござりますといふを。口くせよいへば。有りがた坊と異名せり。

○長崎の鶴亭隠士の少年より畫をたしむ。墨畫の花鳥などことよよく得られたるよし。元より人目驚きんとよもあらむ。みづから心のうつり行くまかせ。或は芭蕉葉の風もやぶれ。或は若竹の雨もさほふなど。あそれよやさしくうつせり。ある時。友人来りて。物語のついで。印の押所を問ひし。答へていふ。印のその押どころ定れるものよあらむ。其繪が出来終れば。こゝよ押しして。くれよと。繪のかたから待つものなりといへり。ある人。これを聞きて。よろづの道。是よおなじ。譬へば座敷々々も。其客の居やうよよりて。上中下の居りどころ出来。また人のあいさつも。その時々のもやうよあり。臨機應變とも。時のよろしきよまたがふともいへることく。一定の相なきもの。まかし其時のもやうの見えからぬ人よ。此段さとしがたし。能くわかる人よ。よくその場を志るなれば。琴柱よ膠せむともといへり

○新吉原京町大文字屋市兵衛の。其かたち見ぐるしく。かしらもカボチやといふ瓜よ似たりとて。みな人かほちやかほちやと異名せしなり。顔かたちも童の謡ふうたのことくなれば。みづから此歌をうたひて。人をあらわしせしとぞ。其比都下よてひさきたる。壹枚繪をこゝよ模寫を



世の後の世のよきあり

▲十二の世の世のよきあり

▲十三の世の世のよきあり

▲十四の世の世のよきあり

▲十五の世の世のよきあり

▲十六の世の世のよきあり

▲十七の世の世のよきあり

▲十八の世の世のよきあり

▲十九の世の世のよきあり

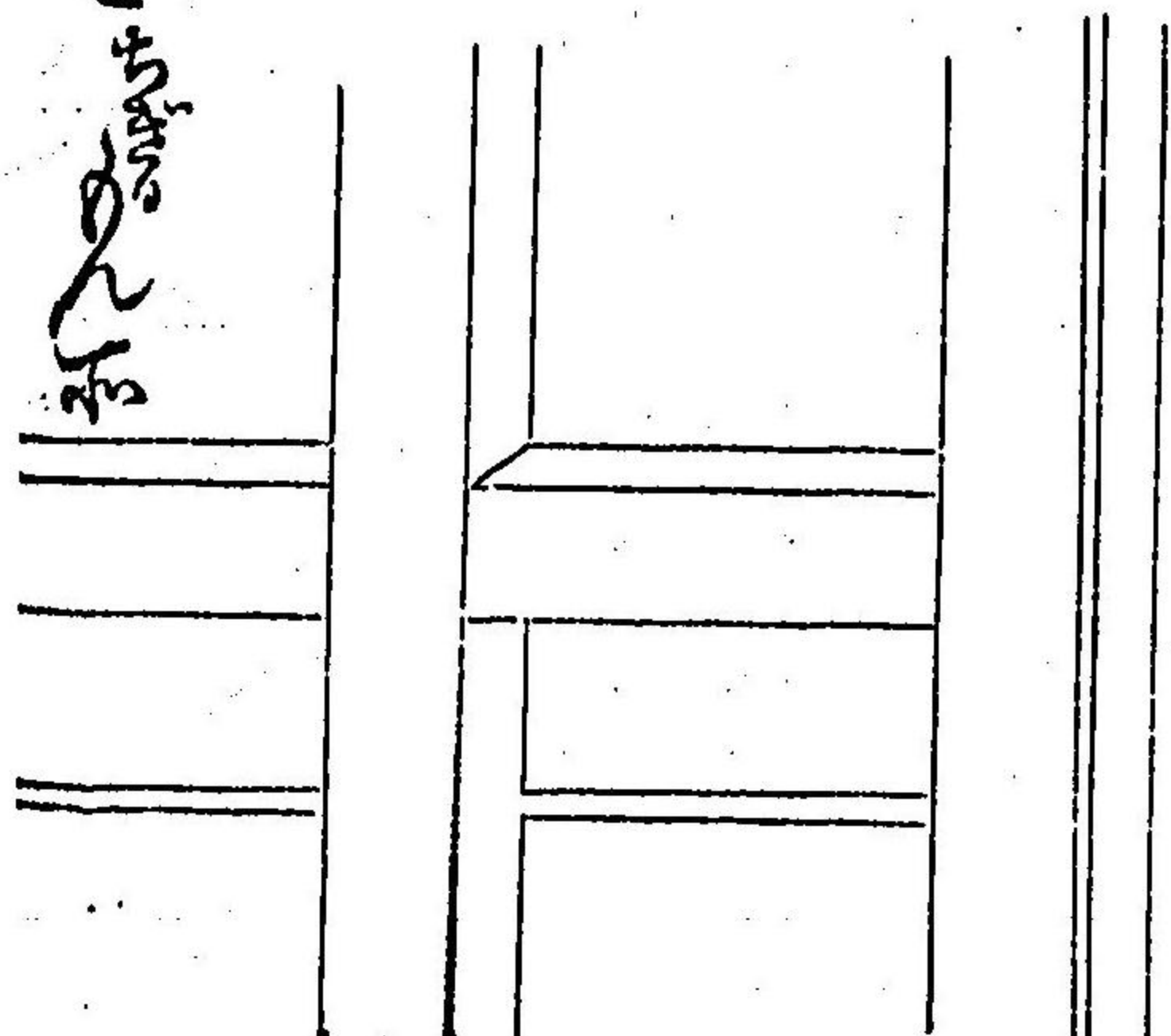
▲二十の世の世のよきあり

▲二十一の世の世のよきあり

▲二十二の世の世のよきあり

▲二十三の世の世のよきあり

▲二十四の世の世のよきあり



補 汰修

其後の市兵衛。狂名を加保茶元成といへり。一とせ此内所よて。狂歌の會ありし時。持佛堂をみれり。先の市兵衛が位牌あり。法名釋佛妙加保信士とありしもおかしかりき。江戸座の俳諧師神田庵が家よ。紀文が涼の酒盃と稱するものを収めてありしを。みたる人のかたりし。何も別よエせる事もなき。朱塗の盃よて。世よいふ小原の形したり。内。鐵線からくさを。猫の畫よしたるものなりき。神田庵主の語よ。むかし紀文盛なりし比。一とせ夏のことなりしが。その日。紀文の淺草川よ船あそびするよし。世間よいひもてふらせしかば。いゝなる遊びをかまるならんと。是を見物せんとするともがら。其日よいたりぬれば。それおくれじと競ひて。舟よ乗りしかば。川の面の水の色さへ見よかぬまでよ所せくもやひつれ。今や紀文が舟の来りなんとて。待ち居たりしよ。夕日かたふく比よもなりぬれど。それぞと覺しきもみえねば。後よいこよかしこふねをさよせて。尋ねめぐるも多かり。やよともしつくる比よもなりぬれば。こよよも盃流れきたりぬ。かしこよも取りあげたりなど。いひのよじりて。やがて舟のうちどよめき。見物よ出ても數艘の舟。後の酒のみ。歌うたふ事もせて。川づらのみ守りあて。たゞさかづきの流れよらんことを待ちて。夫のみあらそひ興じけり。こよまさしく紀文がなしたるよぎなるべし。いざみなかみを

尋ねばやと。舟を墨田綾瀬のほとりまでさしおぼせ。いたらぬくまもなくさがし求め
けれども。其夜のさらし紀文が舟をば見あたらざりしかば。夜ふけ。興つきて。みな人歸り
ぬとぞ。紀文の其日舟あそびよ出づるとのみいひふらしおきて。自分の家ありて。盃を
かりながさせしとぞ。後人々傳へ聞きて。その風流を稱しけるとなん。

言語

○京都五條の邊に風之翁といへるあり。此おきなをのいこく。人情に通じがたまものなり。
まづか五金十金の事にて死なねばならぬといへるも。實の事とまれば。力のおよぶたけ
に。合力もまじきものもあらねど。其やうなる品を以て。人の金銀をかたりとる者も
あれば。又そのたぐひかと思ひて。取りあぬぬもの。世の中多し。されども。その者實の
事にて。いよくたぐぬ義理にて。死しなすれば。さていつの事にてありつるよと。こ
じめて驚き。かゝる事ともあらば。貸すべきものをと思ふ。たれしも同じ事なるべし。こ
れ壮年の時。西國へ商ひに行きたるかへり。播磨瀉にて。難風あひ。命からぐり歸宅
せり。其時の物語を。兩親よきかせなば。無泣き出だし給ふらんと。その後。そろりと折
々となし出だしぬれど。見ぬ事なれば。それほどよのちどろき給ひぬ。たゞそれの怪我も
なくてめでたしなどいひ給ふばかりなり。是が子を愛せざるよのあらむ。無事歸り

雅量補

たるゆゑなり。もし片腕でも脱けて歸らば。そこで驚きもあるべし。さすれば。親子の
間にてさへ。人情に通ぜぬものと覺悟してより。浮世もたのみをくなく思ひて。隱遁せり
といへり。後九十九庵風之と號し。諸國を行脚などして。生涯風流としてをとりしとぞ
四谷に銘屋忠七といふものあり。朝ごとく起き出で。銘をこしらへ。家業をおこたりな
く。少しのひまをもをしみて。三度の食事の外。さらしやむ事なし。暮時よりままひて。
風呂に入り。夫よりやぶれふるびたる鹿服を脱ぎすて。黒羽二重に定紋の付きたる衣
服を着かへ。黒天鰯織の袴の上座して。たむこ二三ぶくまひて。寢所に入る。夜具も。襦
子。純子の類ひにて。これを着て臥す。夜あけぬれば。またく例のふるびたる綿服を着し
て。銘をつくる事。さのふのごとし。人その意をどひければ。人といへるもの。日々おの
れが渡世のみ。心を勞して慰むかたなし。たとへ外にいゑなるたのしみをなすとも。其
中より利を得んと思ふ心のものなる。時しなれば。心のなぐさめよならむ。たゞ夜眠りた
る内むかり。まことのたのしみなり。これよりてさる事をして。性を養ふといへり。實に
生涯外のたのしみなく。齡八十餘歳にて。めでたく終りしよし。山の手よすめる友人の物
かたりしまし。こゝよあるす

捷悟

○下野國足利の里。布屋何がし。壯年より禪法に歸依せり。ある禪師のもとより
かまでいふいろはにほへと聞えたる。それですまねば我あひもせむ
としめされたり。近比七十餘歳にして終れり。そのゆふべ一筆とりて

ちりぬるをわか身ひとりと思ねば。あさきゆめみしゆめの夢の世
と一代一首を書き残せり。年采生死をば。工夫したるなるべし

○芝居ものに見てのみやといふ神を信むるよし。かたをかみハ片男波となり。伊吹山の
かくとだよといへる谷の文。よしといふも大とらひなり。おしつけさなき田といふ新田
もひらくるなるべし

言語

言語

○青樓にて。客人権現の宮を信むるもをかし。山王廿一社の客人権現ハ女神なり。青樓ハ
女客ハいらぬものなり

補風惠

上州新田郡の邊。高山彦九郎といふものあり。いとけなき時。父母よこなれ。祖母のやし
なひよて成長しけるが。もとより學問を好みて。祖母よよくつかへし。祖母やみて死せ
り。その時三年の喪を行んとて。墓所よとらやを造り。其中よ入りて。暑寒風雨をもいと
こむ。籠り居たりしを。ある人問ひけるハ。祖母の喪よ。かくのごときハ禮よあらざるべし

といふ。彦九郎いづく。され効き時。父母よこなれてより。祖母の養育よて。父をなりた
れば。父母の恩ハ祖母よあり。まかるゆゑよかくハし侍るといへり。彦九郎よ一人の男子
あり。六歳よなりけるが。喪中よ父のかたをらよありて。母の病よなかり。彦九郎よ
もやよめて雨のそらハ落ちくるハ哀をまざる涙なりけり。母の病よなかり。彦九郎よ
藤衣ころもさむしと風吹けば木のそちり行く音ぞかなき。母の病よなかり。彦九郎よ
いまだものかく事をまらされ。姉よどかよせけると。かの國の人の物がたりなり。彦九郎よ

徳行

○駒込土物店のほとり。常陸屋何がしとて。報謝宿をまゐる者あり。ある日。門口よ来りて
宿を乞ふものありし。召て仕ふもの。ことなあらハかよしかりて。おどをかきさうりけれ
ば。あるじこれを聞まつけ。いかよさうなる事をいふ。いとまたなげなれば。召しつかひのなき
ば。いかよも癩病よて。こハかじで腐れたとて。いとまたなげなれば。召しつかひのなき
けなく。あしらひたるもげよと思へど。かハるものなきとむる。報謝ならぬ。されど
も。かれらと思ふ所も。いかなれば。とやかくやと思ひ。つらひたる。妻なるものハ
あかしく思ひて。何事を患へたまふと問ひける。じかハぐの事を語りければ。それ
たらどやすき事は侍れ。とく呼びかへさせ給ふ。彦九郎よ。おどをかきさうりけれ

かひの手よりかけきまされ。これいかやうにも扱ひ侍らんといひければ、いとよるこび
 て。被ものをおとより追ひかけて。連れ来り。つひよとめけりとぞ。又常より古き傘を買ひ
 置きて。急雨などより。辻より持ち出で。これらふるく侍れど。ぬれ給ふより。すこしまさ
 り侍らんとて。志るしらぬ。かちなく。からかさもたぬ人よ。あたへけりとなん。
 上州大原より。鐔物師惣左衛門といへるものあり。若き時より書を好みみて。よく記憶せし
 が。ある時。俄に雨ふり来りて。道ゆく人もいそげる中。傘をかぶりて。かしらむかりす
 る。出だして。走りゆく者を見て。惣左衛門の妻のいひける。枕草紙よみのむしのやう
 なる。とらんとかけるも。かゝるさまよといひし。惣左衛門これを聞きて。それかひが
 覺なり。源氏須磨の巻。ひぢがさ雨とかぶりきてといふ所。見えたる事。枕草紙よ
 りあらむと。ふたりこれをいひあらむ。つひよふたつの書を出だしみれば。枕草紙よ
 一條院の御めのと。御ふみ給る所ありて。すまの巻よなし。こゝよかいて。惣左衛
 門のかの書を妻よりちつけて。其まゝ家を出で。同國鳥山村の智のかたへゆきてかへら
 す。それより妻の度々鳥山村より来りて。いろくよいひもふれども。一言のいらへもなく。
 顔をもむけてかへりみる事もなし。智のかたよても。たゞ一二日の滞留と思ひおたるよ。

補怨頼

年をかきぬれど。歸るべき氣色も見えず。皆々の心づかひは。煩る事よといふ事だ。よなく。
 自若として。おの家もあるがごとし。日毎に黄昏より。鎌を持ちて。兼へ出て畑の際へい
 くつとほり穴を掘りおけり。夜あけに至りて。又これを埋む。かくのごとくすること。日々
 かえることなし。此穴夏はすくなく。冬は多し。其ゆゑをとへむ。夜中は起き出で小便を
 穴なりと答へしとなん。おづかの間と思ひし。廿四年ころありて。寛政元年十二月の
 そむめ。六十五歳まで終れり。平賀の。...

雅量

○飯田町真木川岸に孫市といふものあり。護持院原へいきて。往來の人よ茶を煎けて商
 け事を業とす。つねに好みて書をよみ。諸家の系譜。又の記録ものなど。よく記憶せり。さ
 れど。おのが怒とするところ。文選なり。雨などふりて。徒然なる時は。二階よあがりて。
 側より酒一陶をおご。これをのみつ。文選をさかまよしてたのしめり。薄朴よして人と對
 話する。さらし人の善惡をいひ。おの人の撒否を語る者あれば。面をそむけて答ふる
 事なし。花の頃は。東えい。飛鳥のほどり。おのがころのまよあそびくらせり。平日原
 より出で居る。をよ。時とせら。一日に二三度掘りたへ出で。川をのぞき見る事あ
 り。おがなること。おのや。大其の善惡をいひ。おのの。...

大子清寺の難波町にすめり。藥研堀邊に請け負ひたる家の上棟の日、梁のうへより踏みこづして。大地へ落ちたり。人々驚きさわざて。いとぎ引さかこし見れば。隣家の庭の屏の上なる。しのびがへしといふものを。右の脇より左の腹まで。突きつらぬきて有りけれども。清吉少しもひるみし氣色なく。そのまゝ人の肩をかゝりて。急ぎ我家へ立ち歸りて。すゝ酒一升と鮪のさし身を取りよせ。これをのみくひす。家内の者をはじめ。人々もと々むれど聞さいれず。今より療治よかゝりて。毒いみよて何も喰ふ事叶はざれば。日頃すまざる物をくらひて。療治をうけんとして。又蕎麥をとりてこれをもこゝろよくうちくらひて。いざとてかのつらぬきし志のびかへしの竹をひきぬかせ。是より内外の醫療をうけて。日ならむしてつひに平愈して。以前のごとく日々家職をなしたり。此後十四五年も經て。傷寒をこづらひて終れり。さむかりの豪傑なれども。やまひよの勝つことあたしを。定業のがれがたき事なるべし

徳行

○芝三島町。菓子をおきなを新右衛門といへる。少慾至直にして。日ごとく買ふ品の價をあらそふ事なく。賣る人のいふまゝにまかせ。もとめければ。家内の者いぶかりて。商人にいづれも同じ事にて。そのあたへの高下を争ふならひなるよ。いかなれば。かくいふまゝにまたまふぞといふをぞして。かれらの日ごとく重きを荷ひて。朝ごとく出で。ゆふべよの遅く歸ること。暑寒の折からぬ。其くるしみいふべくもあらじ。かのれらの年中店に居て。風雨のうれへもなく。家業をいとまむら有りがたき事ならむ。たとひ人よもの施す事のなしがたくとせめて。その價をあらそむして。もとのなむ。すこしつかれらがたすけともならんかといひける。後よ新右衛門が情ある事をまりて。賣る者も價をひきくして持ち来りしとなん。春の比。遊山よ出でんと思へど。これひとりよての樂みうすしとして。櫻花の咲きみだれたるを。いく枝となく買ひ入れて。これを家の内。こゝかしこは移しくさしかざりて。よき酒さかなあまた調じさせて。妻子をなじめ。存しつかひどもよ。うちまじりつゝたのしみけりとぞ

文學

○東江先生名は鶴。字は文龍。河田文次と稱す。八丁堀に在りし時。門人いまだすくなかりしかば。正月の會をむめは岡部氏とよもよ来るべきよしをいひければゆきし。日向氏その外十餘人なりき。吉原大全といふものつくりしとして。板下のまゝに見せられき。かつて唐詩選の句と。百人一首の下の句をあてせて。青樓の事をしるし。義楚六帖といへる小本を著し置けるなど物語あり。ある日。この先生をむかへて。目白臺の瀑々亭といふよ遊び。酒もりせし時。

白馬とからへる醉客来て。座中をさしおかせしかば。これひそかよそかりてかへせし事あり。先生大よおそれ。かゝるもの。又も拘賢コケンより来りて。さしおせんもよかりがたし。早くたしを立ちさるべしとて。山伏町の彌月樓ヨシツキのゆきて。又々酒くみかたせし時。予狂詩をつくれぬ時。予もよき事さるるもの。日陰の長十郎八郎。

文書

○東野諸君斜曲背八丁白馬横推車門入ハチヤウ。此詩の五頁の會了。

先生此詩を見て。大笑せられた。此後先生の雷名四方ライナに釋さ。日々發行して。漆筆を乞ふ者。門前カドマテの市をなす。貴とまの賤とま。此手跡を學ぶるもの。なかりき。

雅量

○寶永五年十二月。感應寺の隣なる庵室にて。尚齒會あり。此時渡邊幸庵百二十七歳にて上座也。則筆をとりて。不若門前フカガドマテ。日月遲ニ行書。此詩を書す。これを床の間トノに掛けかけり。是上席の者の古實なるよし。此幸庵仕官の比々。きまつゝ。勲功あり。任を辭して後。使船して唐土カラにいたり。天竺阿蘭陀をこじめ。其外の諸州を經あやみ。兼境カミサカイに在る華四十餘年。漸く九十九歳の時歸朝し。都鄙を徘徊すること十

年後武江大塚に閑居す。天正十壬午年。駿河國に出生し寶永八辛卯年。壽百三十歳にて終れり。

假名世説終

世説新語卷之十一 假名世説

いにしへ無義の人有り。今建節の士ありと。論
 衡よみえたれど。善惡雜廁あみお其稟け得たる
 性のをも所よて。古今あんど是をとかたん。文
 筆かじと思いふとも。義あるものい。からず道
 をいたし。學習ありといふ。義ある者は。遊
 戯をかも。辨士則をの欠を談ずるもの。
 文人則其遠きを何らも者。文人辨士とたらば
 いのおのむ所をおるじて。よしを談せさ
 る内。亦是貴鵠賤鷄の説ある也。我師蜀先生。
 慶元以来世よきてえたる人物を慕め也。假名
 世説と題せて。書きさとおるれたるものあり。
 書肆瑞星堂のあるに世あらむとめせ。梓よ鑄

假名世説

國の秋風

ん事を乞ふといへども。先生ひさしく病床に
いまして。筆とる事もこのうしとて。おのれは
其たらざるを補へよとあれど。元より書は乏
しければ。或は師の藏書より抄出し。あるは友
人よもとめ。またのみづゝら記憶したる事ど
もをも書きそへて。いさよ是を論じ。おれを
補ふといへ共。もどより我性愚しして。且いや
しければ撰ぶ所も又これ性よよるならん。た
とひ珊瑚はまどる石瓦あるべし。...

文寶堂志るま

関の秋風

ん事を乞ふといへども。先生ひさしく病床に
いまして。筆とる事もこのうしとて。おのれは
其たらざるを補へよとあれど。元より書は乏
しければ。或は師の藏書より抄出し。あるは友
人よもとめ。またはみづゝら記憶したる事ど
もをも書きをへて。いさゝは是を論ず。あれを
補ふといへ共。もとより我性愚にして。且いや
しければ撰ぶ所も又これ性よるならん。た
とひは珊瑚はまどる石瓦あるべし

文寶堂去るを

松平樂翁小傳

松平樂翁名曰定信將軍吉宗の孫にして田安宗武の七子なり寶曆八年に生れたり出でて白河の城主松平定邦の嗣となり安永四年十一月從五位下と叙せられ上總介と稱して天明三年にたりて封を繼ぎ越中守と改めついで從四位下に進み定信少くして學を好み常に國本論を著して利生安民の策を述べたりある歳飢饉ありて上下大に苦みしかば定信これを憂へ悉封内の租税を免じ自いたく節儉して侍婢一人をととの餘皆暇をとらせたりといふ天明七年將軍家齊職を襲き奏し請ひて定信を老中と爲し從從に任じて諸老の上と班せしめぬ時定信年をほ壯なりしかと身は弊衣を纏ひて厥心を常に菜菔を齧みて足れりとし其の妻はさへ衣席を曳く事なからしめき諸老これを見て大に愧ぢ互に善を戒めしかば下民またこれにならひ華奢の弊風遂に一洗す互にいたれりといひ有徳公吉宗奢侈の無益なる事を覺り天下を令じてこれを禁じたりしを星移り物變りて禁令稍弛ぶといたりたれば定信力めて其の舊政を復せし事を謀り終なりされは當時其の風采を慕はざるものなかりきといふも理なり天明八年家齊皇守を經始し定信をしてこれを監督せしめ工のをなると及び節刀を賜ひてこれ

を賞し寛政五年天皇其の實父典仁親王に尊號を奉り賜ふんとて使を幕府に使を
て旨を傳へしめ賜ひし幕府首を使を營中へ延き定信等をしてこれを拒まじむ使
のものまたこれに服せを論辯數刻にわたり定信辭屈して己みぬ後康永二千石を典仁
親王に獻りしが明年親王薨去し賜ひしかば推尊の儀つひに罷みたり同年七月幕府定
信の職を罷めしかばなほ溜直につらねて政治に參與せしめき定信いたく前日の失敗
を悔ひ本邦の典故に闇きを愧ぢ頗る國史を繕き朝廷の記録等を見て大に悟る所あり
幕政を釐したる事多しといふこの時當りて露國屢わが北邊に寇しまた使を長崎に
遣はして通商を請ひしが我國に久しく封鎖のうちはありて上下太平に押れしをもて
これを恐懼する事甚しかりき定信松平容衆と共に諸國の沿海を巡視し豫これが備を
なして精民心を宥むる事を得たり定信深く學を好み和歌及書に巧なりき其老中の職
にある能く賢に任じ能を使ひて日夜治國の法を講ぜり碩儒柴野栗山頼春水尾藤三洲
古賀精里赤崎海門等信定の顧問なりき老中の職を罷めて後左近衛權少將に任せられ
し文化元年また致仕して樂翁と稱し文政十二年卒しぬ年七十二

關の秋風

白川樂翁著

關の秋風吹き初めていく日もあらぬ。此地に來り侍りぬ。政のひまなく心は浮ぶ事を
かいとめぬ。ゆめ／＼人を見すべきものありあらむかし
むかしの習はしといとむくつけくして。風月の晴なんどたのしむものも少かりきとぞ。
花木多く移し植ゑたる庭を見て。其主よものふてふもの花など見るものありあら
む。とくぬきすてよとそしたなくいひけるとぞ。木訥の野なるいとことやうなれども。文
のみすぎて。史といそんまの勝るべし。今の世のあらむし。風月の情は心をやりて。酒
のみものくふをのみ。專とにするよや。むかしの武をのみこのみて。月花をうすしとし。今
の春をのみこのみて。月花をたふとむ。月花は心をさる一なれども。野なるは仁よちかじ
ともいひてまじ。いで月花をめぐるとふ人の心。賞を盡くす事なんめり。月よむかひて。
目もとなさを打ち守りて。我ありがほよ。古き歌など打ち吟じて。古き人の我を知らむ。我
又古人よのあふ事なし。たゞ月の代々の面影ぞといふめるも。李白の古時の月といひけ

んよおあじ心なるべけれど。其打ち向ふ人。させるさもあるよもあらざれむ。古き人のよしいま出でたりとも。いかで去りえて交り侍らん。かうやうの人よ。心あふ古人ならば。月よこひ侍るよも至り侍らじ。又かたをらの人の。今宵の月の光みまほしくても。夜寒の風たへがたければとて。戸おし立て、酒のむもあり。花などの枝ををしげもなく打ち折りて。酒樽よゆひつけてかへるもあり。又ハ猿樂を催し。あるハ謡聲を出だして。月うちるども。花ゆくもるども去らむ。喪心のやうよくるふもありけり。又ハ我こそといそんむかりよ。燈火も打ち消して。笛などふけるも。此頃習ひけん。ほれてとまればけんか。譜など膝の上よ置きてまむしふさ。まむしやめて。春く々めて譜をかき見て。くるしむもあなり。其外。心うしと思へば。月を見るも花よ向ふも。うきたねとなりつ。心よいかぶまよ。我うささらなり。人のうさまでおもひつ。なま人も此月をためてけん。この花をやうまけんとかもふほど。鶯のかなき事も。我身のうへとのみおもひなさるやうよなりて。只打ち向ひ涙こぼして打ちをる。よし言の葉よのべんも。華よかいとめんも。誰よ見せ誰よつげん。よしつげたらばとて。我かなきのやむべうもあらじ。見せん人も。つげん我も。いつまでか此月をよむかひ侍らんと思ふ程。むかしなづかしく。後

の世も戀ひしくて。膝をいだきて長齋し。とてハ戸閉ぢて興へ入り。枕よせて見れども。心の底をみ渡りていねんやうもなし。月やいるよ。花やいかよとさきられねば。戸おし開き。おし立て。夜をあかし日を暮し侍るもあなるか。又まつ夜ほどふる月よ懐をど。さぬくの別れよ。有明の月をうしとみ。ひもとく花よあこぬとし月をかこち。散り行く花よつれなき命を觀るも。せちよおもてる。只かくうしとみ。たのしと見るも。まなむかふ心のかむるよて。月の光。花の色。とこじなへよかこることをし。またへどもみむかへどもまたしからむ。去りてもうらみむ。昔きてもいからぬよぞ。代々の人々月花よめでし思ひを盡をも。さる事なるべし。文のかまよ侍りて。たむこをひてんと。火とり引き寄せ見れば。火の消えたり。いとほいうしなひて。させるもて灰かきあらとして見れば。ほたる火の光したるが。二つ三つみゆるぞ。又なくうれし

十月初めつかた。増見村へ行き。山々の鹿をおひ出だしたり。狩人も多く出でたり。されども其日雪もふらねば。獵獲も少なかりきといふ。雪ふりたらばと心よ約したりけれど。其後強ひてふらざりければゆかむなりよき。二たび白川の城へ行きぬる時。年の凶よおひたれば。吾しぐしける女もとぶきて。野川菊井といふ老女をのみつれたり。妻室の同道

し。人の少なし。いとさびし。野川。初のほど。白川の所の名をかしく。さびしさも又あつ
かなるも。いと心よ叶ひたりといひたれども。月日のふるほどよ。さびしさよもあまてや
ありけん。江都へかへりたしとのみいひたりければ。初よの似ぬことよといひしよ。野川
も。今いひかふべき言葉もなく。まむしが程こそ野山のやうも珍らしく思ひし。今
の誠よ秋風そよぐ白川なりといひて抱腹しぬ。下部の女。豆をかこんどて。下部男を呼び
て。其由いひしかば。なじよだ豆だむしといひぬ。女。豆の名なるべしと思ひけん。其な
じよだ豆よて侍るといひければ。男いとうたがひたるさまして。又いひぬ。かたをらよ此
國の事をおぼえたるがうちききて。をらひつゝ。なよの豆よて候かと問ふことよ候とい
ひければ。かたみよをらよたをさりたりとぞ。なじよと。何條といふことなるべし。むし
と。此國よて言葉のまゝよつくる事あり。いつか。田家の童の田面よいたるよ。何をまか
ととひしかば。そい。ねよだむしとこたへま
過ぎよし頃。城の東小目川村のほどり。七まがりといふ坂よ。鬼出づといひ出でたり。我
も人も打ちつれて見よ行きけり。見まといふもあり。又みざりまといふもありたり。見
まといふも心々よてかたりたるよ。形も一定ならを聞えしかば。いよく鬼をめぐり

て。みなく西へ後みせぬなく。此事いとぬ人もなし。よくみたる人のかたりしよ。鬼
よてのあらざりけり。けものなりといふ。我ががほよかまへて高くしたる人。我が徳
よて。名よおふけものよ出でしよやと思ひたるも有りけらし。其後狩人鏡丸よて打ち留
めたるを見れば。羚羊なりけり。こころよていづらむこといふ
このあたり。雪の降るも越のやうはあらねど。冬の初より日毎のやうよふるなり。され
ども風烈しくて木々の枝よつもらむ。ふりよべれば。忍氷待りて。江都の氣色よかされり
春野のおもかげ有りともいひつべし
勝屋宣利の舊都よりつき給ふ人なり。是も我よ隨ひて此地よ勤仕侍りぬ。交えるべき友
もなくいと淋しければ。古郷へ歸る日をのみ待つどねよ。ものしたるさまなり。ある日青
よよし奈良の里より作り出せるうちその骨をかぞへみて。そのかをよりも此地よと
まる日數の増りぬと。かまじみて。むかし斑女の扇を見てかまじみ。今の宣利の。うちを
見て。故郷をまたふ心よて侍るといひてをらひぬ。されどもちかかしき友のともあれ。かぞ
母兄第
いろをらからよも立ち別れて。あまさかるひなの住居のわびじきの中よも。もつか。膝を
いろよいとせとを室よのみ十年を送る。誠よさもありぬべし

小澤龍庵も同じく爰へ勤仕に出でたり。羊の程若からぬといふ故郷をのみ戀ひしく思ひしが。二人のいひし。月日のたつも駒の際過ぐるやうこそあなれ。されどまつ日の速きやうに覺ゆ。此地に留り給ふもいまだ百日餘りなり。さぞとびしからんときこそしかば。龍庵聞きて修行者など。水をあみて百日を送くるものもあなれば。いかでとびしかるべきといひぬ。勤仕のくるしみの水あみ侍るほどにあらざりけらし。久しく逢てぬ人よあふてり。こゝ久しくあてざりけり。安全にてこそといふより外もなぐ。何となくつゝましく。そぢかしく。帯のあたりのみ見やりて。顔など見あふ事も世を。まむし打ちまほれてひたすらをなかしぬぐふ。いとせちなり

をかしげなる所へ書きたる書のおく。京何町。江戸何町。何右衛門。何兵衛板元とかけるいと口をし。めでたくかなしうしたる弓の。本をのあたり。ぬり残して弓打ちたる人の名みゆるいといやし。この國まで。霜月の初めつかた。みな門々へ穴をうがちむしろもておほふ事なり。いかなる事ぞとひし。是より霜雪いたく氷れば。年の暮に松建て渡をべうもなし。いまその用意するなりといひぬ

七月

鳥峠といふ山。いと高くして木立茂りたり。ここのふみづきの半。残る暑は絶えかねて

かの山へ入りし。此地覺えたる人。山の上のいと寒し。わた入りたる。衣用意をべしといひければ。みなく慌びて。坂のぼるほどのあつさも。山上の寒はあきれなん。されども此ひとへの衣は汗返りたるを。俄に寒風は晒しなば病をやりけなんといひてうち登る。上の方を見れば。長坂の。むねにつくやうに覺ゆれば。みな足のあたりのみ見て。先立の人よまたがひたり。ふもとよりも。木立の間。坂のくるしさはあつさもたへがたければ。中々頂へつゝるかなるべしと思ひし。先立の人。こゝ頂よ来よけりといふまゝ嬉しくも見れば。そのながめいふべくもなし。数十里の間うちこれて。麓の山よみえしもあり。つかの様よみえ。川なども帯引きたらんやう。大きな木も。そりならべたてけん如し。其眺たぐひなき。皆々言葉もなかりしが。やゝありて頂の寒さときこえしが此暑さの麓も増るべし。たえて吹きかふ風もなけれど。この汗の衣のいかにしてはしてんといへば。みなく夫よつれて初はたかひしことをといひとよみければ。此地まじりたる者も詮方なくて。常よ引きかへたる暑なり。箇様の事の我もあらむいとまれなりといひぬ

かみよ油つけて。うるじまたるやうにぬりかため。色好まるをのこり。紅粉など顔は
どこも。衣もうつくしきをこのみたり。夫より又うつり行きて。今かみよも油をうま
つけて。びんかきみだし。きのふむすびけんやうなるを好み。衣もうつくしきをばき。袖
などもそろとぬをいとぬさま。只色をも捨てたりとみゆるなり。今よていと。油つけ
たるらつゝしむ風情あれ。よしともせん。世の人いろよそみ。芥よぶけりて。其ならし
よなりもて行くも。かなじまといよ歸するとやいそん。女なき世ならましか。かゝるな
らそしのかこり行く事も侍らじ。かこき人の稱を見な。其名も世々よくちじ。上たる
父の譽を得なを。職任もかもかるべし。夫をもふりすて。女の稱譽をのみ。得てほしく思
ふぞかなしき。色このみする男の。かほよき妻もつらなく。戀ひわびて妻を得しもの。衆
ゆるのまれなるべし。夫の方より兎や角物のいひ出だして。中惡しくなりたる。ほどなく
打ちつけて初よりむつまじくなるものなり。女の方よりあらそひ出でたる。初よかへ
るだほいとぬたし。今ひとまら打ちつけよ。今一言かまほしと思ふほどなる。な
ほとをうりらみもの。こもやうはあなれども。いとたふと女をたぬり。うちつけ物がた
りして。男の顔まをぬらを見て。つゝまじけとひもな。ほどなくいびきかきてねた

る。いとあさまし年若きもの。我いとけなき時といひ出でたるよ。としおいたる
女の。佛このまぬ又にくし。とらんべのいかのほりあげぬも又にくし。若き女の道行は袖
は手してくひさし出だし。我がほなるさま。又なくよくし。國家の政をも執り行ふ人の。
舞は杖つくよとひは成り侍りて。文の道つゆしらせして。若き男らとうち交り。遊藝をの
み學ぶ。又奴氣なくいとにくし。此頃。夜とことよいねを。さまづよねまほしく思ふほど。かねの音をかぞへ。鳥の聲を
き。竟の音もうるさくて。まむし目をとちて見れども。夢みんやうもなし。かくねまほし
くおもふ程ねられぬ。よしひとよおきて明さをやと思ひさりても。兎角ねまほしさ
心のみあすられぬ。ほどちかきあたりよ。いねし人も。今や夢など見るらんとおもへば。い
とむねくるし。さらばよその事を思ひ出だしまざれんと。心よもあらぬ。をかしき事。た
のしき事など思ひみれど。いつらうちあすれて。夢をいづか見んとのみ思ふなり。夜も
や。更け行けぬ。いとさびしくて。こしかた行く末の事など思ひつゞけ。ある心くる
しき事などかうかへて。夢もみつかぬ。せん方をくすくすしよとひければ。只物をふかく
かりが入て。心を勞し侍る事なるやうよと諫む。されども短才重任。いかでかうかへ侍

る事なくてありなん。さるをうちわすれて意とせむ。又國主の職を志るべきやうもなしといへん。とまれかくまれ。才短く任重きせん方なし。酒飲こそをかじけれ。されども今の世。うちよりむせみ飲む。賓主の禮をも失ひ。手をかさへてしひてのませ。肴もさみて投げちらし。後の席上。酒打ち流しなどするぞあろき。そのまひ侍る人。いたけ高し成りつ。詞荒くいさめきて。のみ侍らむとく。此席を出てよ。のみたらばゆるしてんまどきこゆ。まひらるる人も。うち腹立てる風情にて。我一人りよかくしひ侍ること奇怪なれ。人のみ侍らぬうちいかよいふとも。のむまじと云ひて。あらけなきをのこ三人。かたみまひぢこり。ひたひますぢいだし。顔赤らめなどして。いかなる。國の存亡安危にかゝる事上や思へる。そのさまよけなく愚なり。其中は酒仙ともいふべきが。此盃のむはたらむとて。おもてかくるるむかりの盃取り出だし。鯨の水吸ふやうのみたれば。みを目出度さのみ様とて。戦の場にて功名したらんごとし。又酒うけて盃のこし少し見ゆれば。いと淺間しき業かな。満つをかりよ受け給へといへば。又いたく辭してうけがを。よし其酒ましてうけたらんごとし。さのみ事もあらじを。よがしく辭するも愚なり。瓶子の酒のかよりしを。一つのみて後入よすむる。酒の味とあたりのしほどを心

みるなれば。先よりしひて瓶子のかよりしどのみ給へといふ。理しらぬにてぞありける。かゞる酒夜のむしろ。こゝかしこ五人六人ほどつとひ合ひて。定まりたる賓主もなし。あるはたふれふして病者となるもあり。あるはえんのほとりへてひ出で。えもいそぬ事するもあり。あるは席をよげて出で。大路よいぬるもあり。またのそぎの毛みゆるをかりよからげて。盃盤の間々をどびこえてすむるもあり。酒のみがてよしてよけまよふを。袖引はすきてのますれば。眉ひをゆ。目をどぢ。胸打ちたゞまてくるしむもあり。四十よあまる女の。髪も所々白さが。紅こちたくつけたる。口ひろらかよして。若き男のかたこら近く。ねぢより差よりつ。あらぬ事なんといふもあり。いとえんなる女房など。まひ狂ひて髪打ち散らし。もすそ亂し。風いづるむかりありきて。をのこのあたり。きらぬもあり。年若き男。初の程こそありけれ。後よ柱よ打ちより。白がねのさせるひたひふすぶるむかり。空さまよわけてのみ。又のゆびのさきよ横たへて。水まく如く廻し。つらよ手なんとあて。謡歌うたひつ。そるかへたよりて唾壺へつをとむすと。我が顔の風情なり。そての女の手などとりて。酒のみてんやなどきこゆるも淺まし。又の二人さし向ひて。かたみ^互指の^互かかめるやらん。聲高よのしりて勝負あらむ。又聲のかさ

りうたひて。顔あつき事いふも。興をささまほしくもあふなん。あがひやうしのもじり。
 聲のあしき。姿のあしきも打ちわすれて立ちまゝひつゝ。盃ふみあり。着ちらすもあり。只
 下戸の側におそれたるさまして。目のみうごかして。まりもあらば逃げ出でんとする。
 此内の智者ともいひつべし。酔なまざる物。過ごし事など言ひ出だして。雨降となさ
 てる。酒のむほどよ。其座立ちされよといふ。まひ侍らぬものをあふといふぞかましき
 として。ひたなきよなくを。酔ふてとら立つものさして。此いとひの席は涙こぼまこと心得
 ね。ぶけうのふるまひ見るやからう。此むしろよつらなるまじと。いらゝかよいふを。酔ひ
 て笑ふものうちさして。何のかなき事も。腹ふくるゝ事もなきを。あのみみだおとすふ
 ぜい。いかりのゝしるさま。いと珍らしと腹うちかへて笑ふ。何れも酔のうへなれば。是
 非いんやうもなし。只尤さる事なり。まことまりなき道理なりといひて。なぐさむ人のと
 つかさまよ。あけの日。其事いひ出でん。そのあさせる事有りしか。いとつかして。
 しらぬさまなるも。心得のうとくして。思ひなるへて。暑き日もあするゝとして。盃かた
 ぶけ。汗打ち流すもいかなる事よか。うれひをも忘るといへど。酒よて過をなし。とぢを
 得て。家をほろぼし。身を失ふもあなれば。うれひたふものとなし。昨日酒のみで。

今日の心地死ぬべくありとて。枕より。かゆすゝりて。酒のよほひをも。嫌ふこと。よし
 命ありても下戸より成りぬべきと見れば。程なく始めよかへるぞかひなき。其外何の職
 何の任よなりたれば。其位尊く任かまきを賀するよりも。猶々慎みて着を去り。風教の助
 なすべき。殊勝の事なるべし。農よなりて鋤鎌なども調ねぬ。財をつひやして酒のみ。
 農よなりたるをことし。いかなることよや侍らん。廻てふ虫や。又なくよくし。晝寐の夢
 妨ぐる。怠りをいさむといふといふべければ。とがめむやうもなし。たゞ書なんど見。晝
 なんと。書くころ。顔のあたりよ。ひとつふたつとまるを追ひやれば。まじかなたへうつ
 り。又飛び来り飛び去り。とて。友おほく集へて闘詩し。ある。えもいたぬふるまひらう
 ぜきなり。又敷てふ虫もよくきのあるべからむ。夏の夕。涼しき。端居して。笛のまやうか
 なんどいへば。早其聲を志るべし。飛来り。己が名呼ぶ聲いとうるさし。蚊遣りふすられ
 ど。煙り薄さほどのなほ立ちさらむ。人もたへかぬる頃。かれもまむし立ち行き侍るを。其
 隙を得て帳打ち垂れつゝ。今宵の安きいぬべかめるとおもふうち。耳のあたりよ。聲し
 て。枕のあたりきりぬるいとよくし。志すくもて焼き殺してんとおもへど。起きあがるほ
 どのわびしければ。人のとひ出でん。晝くせよと。まどく持ちありくほかげの目よで

りそひて。ねぶさいとたへがたし。鏡は留まりてさすをこやうちよりては。とぶともみえ
 を。腰ふくるむかりすのせて打ては。血打ち散りてけがらひて。只手と足との裏さしたら
 んの。かゆさもそこさすべうもなく。ひたうきよかきてもあたらぎ。いとくるじ。ひるの
 程も。調度ならべ置くかたはらより。まのびやかよ出で。害ふのみ。足よ白き斑ありて。こ
 と國よもとらをもて名づけし類なるべし。秋の末がた。漸夜寒の頃。此虫も夏の程のとし
 わかくわざすぐれたる心よ。ひたすらうちとまりて。させどもすひども。己か口はじ七
 つ八つよさけたれば。心ばかりよて業おとりするぞおろかなる。此外虱のみなどいふ虫
 も。おなじ憎さなるべし。身よまらざれば。おぶさぬ。初葉よとらてあるべし。ささらざのは
 じめも。いまだ雪うちふり。氷かたくて。梅などもいまだ咲かぬ。江都のかの卧龍てふ梅も
 散りたりと聞きて。いとゆめかじきのあまり。古郷へ文やるごとよ。一夜明けてはるよな
 りたれば。迷職のほどちかきやうよ侍るとのみいひやりたり。或日、冥川寺へ来りぬ。和尚
 などいで。物語をたり。予硯よせて
 縦獲雜活本是有心。縦獲雜活本は無心と書きて
 絶えてし谷の棧渡りつ。月なき里の光をぞ見る」とよみたり。夫より元門定忠

等かのく題をさぐりてよみ出でたり。予も春月と花との題を得たり

まつけしな。幾春をかこふる寺の。こけの軒端よかすむよの月

咲く花の散るも惜まじ。山寺のかねて心よ思ひ知る身は「裡を得じかば庖丁して汁

よさせたり。誰しも初めでくふ事なれば。一たびくひては頭うちかたぶけ。まむしかうが

べまむじ味ふほどよ。其匂ひいとあじく。みなくくをを掩ひて吐き出だしたり。搦尾何

某もおなじく喰ひしが。強食の名を得たりや有けん。其肉を只よ吞みての汁をすひつ。

三度までかへたり。さらば開かよ味ひてといへば。うまさきまなれど味ひもせて。汁打ち

吸ひてひたのみよ吞みたり。賈のなをかほふ人よもかたらざりけりとして興じぬ

裡の頭をよきて其灰を用ふれば。失心風を治すといへり。裡を得なばとくく出だすべ

じと。國中へ解きたりければ。二三足打ち殺して出だしけり。みるもの兩の足をひらき。そ

の毛をわけ。まむじ頭をかたぶけて。こけ灘をりとして笑ふ。裡のかくし所の袋の。席八つま

ぐむかりもありといひたればなるべし。其後。生をがら得たりとて。あやじき箱よ入れて

出だしたり。ひらき侍らむを見べきやうなし。いかんせん戸おじかため。一間まつら

ひつ。いで此ふたあけよといへど。たれじもこころよからむとてあけぬ。豊田何がしを

してまひてひらかせたり。狸の足からめてありければ。森々のみよして出てもやうむ。近づけばえならぬ匂ひたへむ。寄合ふ人とてもなし。とく狩人へ返しおたへよとて。又ふたを覆ひ。此ふくろの見るべうもなし。むしろ八つじくむかりなりとも。かゝるのうちに。いかでその術をなしてんやとてあらひぬ。

去年九月の初。甲子の山へ行き侍りぬ。城をば曉頃よ出でし。四五里よして夜のあけたり。まゝだひらといふ所の。平かなる野のこてり山よ續きたり。眺いとをかじ。江の澤の邊。木立なんといふ所の。皆紅葉のみ生ひ立ちて。萬山一紅ともいふべし。猿の聲などもしたり。かまかね橋といふ。後などの様よ木の枝あみならべて。山の岨へ懸け渡したり。蜀のかけをしなどいふも此類よやあらん。其橋渡りて見れば。清き瀧のかじこの岩。この石よあたりて白玉くだくるやうよなん。實よ此景色のかじ山第一ともいふべし。是より先の。坂のけとささいふべくもあらむ。いと苦し。温泉の景色もいとをかじ。予道すがら畫きて都のつとよせばやとおもひたれど。言のことも筆も。いかよ文くこへ花をかせ。筆をまよし五彩をほどこしたればとて。萬分の一よもいかでおよび侍らん。白川へ至りてかじの山見ざらん。孔子の門過ぎていらざるがごとし。かじの山へいたりて楓葉の景色

ざらん。堂よ至りて室よいらざるがごとし。もみちの紅。水の白妙よりして。大なる石の十歩廿歩よおよび。小なるの目よもおよむ。みな其形をなしつつ。ことごとくの色を顯じて。水よより山よそひ。谷よ望み坂よ横たふるさま。云ひ盡しがたし。まいて風雨霜雪花月の折々。うつり行くけしきいかにあらん。道の險しさをいとひあべ。又かゝるながめもしらじ。虎穴よ入らざれば虎兒を得ざるといへるよひとしとやせむ。日長し。事の少し。勤の繁からむ。又させる能もなく。いかよして日を消し侍らん。傍の人よも物語して慰めよといひし。物語する者もなし。おなじ事よ日長し。夜の短しと雖もしれる事のみいふなり。いで此地よありて。人の恐しかりし事をいふも。此國の人のうへなり。かゝる拙さ。かゝるおろかなること侍りきといふも。此國の人のうへなり。いとおろるべき質ぞといふも。此國の事なり。さらば此頃とて。かたる事みを此國の外ならねば。いふべき言の葉もなし。其人の善きとあしきと。政の得しと失ひしと。其職をまゐる有司ありていへば。内官のいふべき事よのあらむ。さればとて。國豊よ人々ともむといふ事のみ。ながくしう日ごとよ云ひ出づべきやうもなし。物語せざるもうべなり。

秋の頃民家はよりし。餅くひ居たり。見れば小麥の粉を團よして。さくけの葉をもてつ

つみ。其儘火の内へ投ぐるなり。其樂のやけ盡くるを期してくらふ。いとらまじとぞ
 此頃桑名長壽院の元より。遊まし極といふを送りぬ。珍しき物あり。されどもしぶなして
 ぬ。名のみなるべし。ことごとくしき名かたとほゝみみて聞き見れば。實も常よりいと
 美し。割りて見れむしぶの衣はなくて。白妙のこたへ顯れたり。見るものみを驚く。其箱の
 傍に書きたる物あり。ひらき見れば。祖公御馬上にて接ぎ給ひし木なり。其後いかゞ實を
 植ふ枝取りても。おほく生ひ出でず。生ひ出でゝもかゝるゝまゝ。今の其樹の靈をしりて。枝
 など折り取るものもなしとや。いとたふと事なり。予常は極の實をこのみてくふ。祖公
 も好み給ひきといふ人のありければ。藤輪の任をあぐる事。いかで祖公の烈は従ふ事か。
 てむかゝ好みとてひじりといいかでいとんといひき。予が名を定信といふ。祖公もむか
 しが程の。かく稱し給ひしよし。予號を旭峯と云ひ。祖公も俊峯と號し給ひしよし。いづれ
 も俊は知れたり。偶中とやいとん。なほ不才をこぢぬ
 其年饑饉しければ。吏食をや。租税をゆるし。除疫の灸を教へなどしけるを。久米石村は
 藤藏といふ者ありしが。ことよいたうよろこびて餅をさげ。恩を報せんしるじ。昔
 へはしきよし願ひ出で。せめ打ちをりてさげぬ。其願の志ぬいたるもの見しよ。その

言のこのつたなきが中よ。田家の方言をまじへ。夫のいとすすがた丈夫なりき
 遠山猿平といふ。櫻やうの事のみあづかる職なり。顔猿に似たりければ。かく名をいひ
 たり。ある頃ある人の。かれが宿へ行きて。遠山の鹿の皮をさながら。其肉を手ぐひし
 て口も血も滌みたり。つままよびてうつを物持ち来れと云ひて。持ち来たるをみれば。さ
 るのみしら。尖の手足多くありたり。鬼の袖ともいふべしとてぬたりきとぞ
 生れて自まひし人の。五色を知るも。常の人のあるも同じ事なり。目まひし人よ。五色はい
 かなる色とか思ふ。云ひて見るべしと問へば。いこれぬよぞ。さればことあらざりけれと
 てあらふ。云とねばことあれ。黒さかくろく。さうらうの白しと思ふ。誰も同じ事なり。常
 人とても。いかでことむよ。五色をいひ侍るもの侍らん。黒の斯くして我髪をさし。白さ
 らかくして我齒をさす。たどへといふなり。かくいふ事。盲人もいふべし。目あるゆゑ
 は見てあり。耳あるゆゑよさしてあると思ふ。かなしき事なり
 毎 年
 年のこと。領國よありとある寺院神官驗者など。城へ出でて賀する事なり。皆こゝをせよ
 と威儀つらひをせよと。郵よのみすめれば。いといたくむくつけきさまなり。狩衣よ
 冠きて笏を持ち。途向ふより膝行して。笏を衣の襟にさしてさみ。或は笏を直したて。頭を

斜にして稽首するなど。皆々舌をかむ事なり。ひとりのけんじや。あしき病よやかゝりけん。を穴のみ見ゆるなり。其面をもとぢよしてとさんいたゞき出でたる様。誠よをの頼よやあるらん。目四つやあるらんと思ふばかりよて。みぞかよのらをかゝへ侍ることなり

こと。三條目といふ村の景政寺へ来りぬ。堂の後へ行きて見れば。石碑多くありけり。其中よのいと苦むしたるもあり。又倒れたるもあり。此頃まうでけんと思ふむかりよ。かれ葉少き花など備へたるも有りたり。いでや生きたしいける物。誰か死なからん。陰陽晝夜四時の行ゆるよよりして。松の千とせの壽。朝靨の一日の榮。世よありとある物。始より終なきのあらじを。今更なげくよしなき事なめり。されども生の好物。死は惡物とて。いづれか。生をこのみて死をよくまぬものなからん。されどもつひよ愛よ歸せざるものもなし。此地よりづもれ。この名をいたゞきたらん人も。やまひよかゝりてくすしを極め。人々保護しても命なきまりて。かく成りたるもありなん。老いたるかぞいろを残して。海山の思をも報ぜむ。孝子のうらみを地下よ残すもありなん。夫よ先立ちて同穴の契りをあまねぬ烈婦もありなん。妻をのこして活命を見ざる丈夫もあらん。やうくよそたてあげ

て。月よ花よと愛したるみとり子の。つゆとさえしもありなん。病を得てして。聞論より身を失ひたるもありなん。たゞいといたう心ぐるしうものまざる。年のゆきよ逢へて。くふ物もたらむ。思ふ衣もなくて。一生を終へしもありやせん。又病よかゝりて。藥もとむべき力もなく。あるは鯨寡孤獨よして誰あはれむ人なきもありやせん。いとかしこきをのこの道しりたるが。人もしらむして草芥よ等しく朽ちしもありやせん。誠よあされむべき事なりかし。其所縁の人のまうで侍るとても。さりよし日ばかり思ひ出でよと入ら。つねとふ人もなくて。卒都婆も苦むし。木のとふり埋みて。嵐のこととふも月の宿かるもいかでなからん。人の心をなぐさめ侍らん年々の春の草のみ。心なり生ひ出でよ。啼くてふ鳥も虫の音も。むかしの世をや觀じ侍らん。縁の苦もふりてのちのしのふ人も。この地下ようらみを合むやうよなりもて行きなば。其人を忍ぶだよまれよなり侍らん。終よのしるものもなくて。ふる塚のすかれてこと人のつかとやなりなん。其後も年を経なば。田となり。野とやならまし。たゞ生死の詮方なし。うゑむこゑをよして命を盡くし。賢さ才のあるも。其ほどく人よしられ。世よいづるやうよなり侍る。又かくまでの思ひ侍らじとて。寺の軒ばのかくるよまで。うちかへりつゝ見送りぬ

まのゝと草の。宗因翁の道歌集の名なり。納涼の歌。

池廣み寄せくる波は風見えて松の音をさ陰も涼しき」忍親昵戀のうたよ

今こそは。まられぬ草のゆかりまで。果の思ひの露もそふらめ「いづれも全調のうたとやいそん。今やなし。大息よたへを。去歳より春の初まで雨ふらざりければ。麥など皆かれ葉の芝のやうに成りなん。野邊へ出づる時。八龍神の社を過ぐる折しも。心よ雨を念ぜしよ。其明の日雨ふりて麥もみみどりよかへりぬ。いと辱じけなきのあまり。二たび社の造營をいひつけぬ。こぞさつきみな月の頃。雨ふりて秋のたのみ覺束なし。この社へ晴をいのりしかば。其日はこれにて有年と成りぬ。

故郷よりの便を常し待ちて侍るなり。便有りたりと聞けば。其文を手よ取るも遅しといとぞつゝ。其封を切りとくも心いとせとし。やうく開きて安全の二字を見れば。又こぞ文を開き見んとして。心つかえるものなり。何のしを送り越せるよりも。只自毫の文のこまやかなるいとうれし。只一筆安全とのみ書きて。させるふしもかゝを。かさねてくしく申入候そんなどある。いとゞ口をし。妻呼び迎へたるあけの日。聞より起き出でたらん心の内。何となりつゝまし。いつまでもかゝる心は。こまれ侍らむ。いとめでたく

さかえ侍らん。女のひたひよこちたくまみぬりたる。見ぐるし。男のかみのうしろのかた多くとりて。かみのひまぶく青く見ゆるぞいとこころさ。夫のこと國へ行きたるよ。妻の方より文こして。其國の紅粉。色ことよあなるよし聞き侍りぬ。いとゞ送り給へといひ越したるぞよくき。あかき女の。ともしくらうかゝげて。よそひをせんなんといふあしく。赤き色なと見て。いやしき色かなといはん評ばかりよみやりて。墨畫の竹。白檀のよほひのめてたしなどいふ。又あろし

人の方へ行きて。物語などするも心得ありたき事をめり。あるじの名残をしき程に歸ることよけれ。あるじ餘所見しつゝ。日はいと短かし。この頃はいと事多し。とや日も暮れなん。夜もいまだ長からむ。又しとぶさして。此頃の風寒は感ずる病おほくあり。いとおそろし。日影を見つゝ鐘かぞへなんとして。さぞ事おほからんが。よくぞ語り給ふ。酒をよめたけれど。ここの外塵事しげく人もなければ。ほいしなひ侍るなりとやうのこときこえたらば。とく歸るべし

なくてよき物の。女の文才。日記は晴天書きたる。くすしの髪拙さ。歌の枕言葉よみたる。武夫の美服。寺は鳥飼ひたる。後室の化粧。盲人の老いて目のあきたる。栗の花。法師の額

は黒入れたる。ありてよき物の。日暮しの聲。女のみだの内の空たきもの。才能職任より
 おとりたる者の更りたる。若き女の癪やめる
 ありてよき物よく。あしきものあしきもの。やんごとなき人の才能。金持ちたる人。女の衣
 またき物こめたる。緋おどしのよろひ。宴室に頼かけたる
 たわれめまたわれて。一生たわれ男の名を取り。たわれ暮して終るのいとわろかなり。た
 られ女の誠なきをしりて。我方よりもいつなり云ひてたふらかしてんとおもふが。後
 のいつそりいふをよくみて。我も偽いともまじとおもふに淺まし。あしき友どちよめでた
 くいそれんとて。人の爲よかゝる淺ましきわざなんどなして。一生をあやまるぞわろか
 よよきき。若き人などうちまをひて。あしき道教ふる猶よくし。此道しらざらんをのこり。
 人情のありなきをしらじといへど。さなんいへること。何の書よかあらん。いといふか
 し。古の情しり給ひたるか。しこき人の。皆この道に入りけんよ。かゝることありなき事
 よことわりつけていふぞよげなくよき事
 多井某の。祖母よつかへていとまめやかよ孝を盡し侍りぬ。予もかれが家よ立ち寄りた

り。多井某。祖母をいだきて出でたり。祖母も喜ぶのあまりは聲あげてなきたり。予が来
 りし恩を謝する心よ。手をあげていそんとしても。なきよなきていそと。とかくして席
 よふしたり。かたならし居ける者。皆涙おとさぬをなかりけり
 主君の不興を蒙り。あるは若氣の罪を犯し。國遠などせしも。年を経てさきの非を悔い改
 めんものよ。智勇も人よ勝れたらん。あんめり。國家の衰廢よのぞんで。忠義の爲よ心ざ
 しを盡さむもの。たとひ重き罪ありとも。其忠功よよつてとがをゆるうせんといそ。
 誠忠の義士もあらわれ出でなん。さきのあやまりを悔いなんものよこそ。かゝる期よ臨
 みて脊骨碎身の力を盡し。國よ報いてん心ざし。誠よありと思ふべきなれ。たゝかゝる
 事をいひ出だして。しゆくんのあるべうもおぼえむ。みづからなせるわざとひのがれざ
 る。げよさる事をめり。空しく土芥よ義氣を埋みてん。さりながら治亂よよるべし。とか
 り思ひておそれざらんや
 冬きたる後。この雪かこひ取り捨てたる心地すめり。鳥のむくつけき鳥なれど。孝つ
 くす心をへあわれなり。元日のあけぼの。東のかたまたらみ行くほど。黒き林の中より。聲の
 み聞えて飛び行くもをかし。星みえぬばかり月さえたる夜。晝の心地して槍よ打ちさる

りて鳴きたる又をかじ。夏の夕つがた。日もいりてて涼しき頃。ねぐらとひかくれたるが。二つ三つ飛び行くもをかじ。雪ふり積りて。庭も野山もこといろなきよ。獨飛びかぶもこえありてをかじ

宮仕の女。聲ほそまなく。子あまたうみし女の。髪多まなく。聲いと高うすめるをこの。色黒まなく。ひげおほきが髪おほまなく。稀なり

まづしき家よ。子あまたあるぞくるしき。乳いでぬ猶くるし。子の。人のかけ行きて。よまきぬ著。よまきものくふを見て。うらやむをまきも。いとくるし。あるやみて難近く物あま

のふ聲まきて。得まほしとしてなくよ。かふべき物なき。せちよくるし。をうなの子の。くせかたあなるが。年たけたれど。せんすべなき。又なくくるし

物まりたる人の。其ことよなきよ。言葉のとしく委しまないふまもあらじ。若き男の子の。武藝學むぬぞいとよま

夕立と雪とのことよ心の外なる物をめり。けふの雲出てたり。昔おき立つかなど思ふよ。月のまじ出づる頃の雲もなし。此頃の寒の只よあるといふほど。うす雲の雲絶間な

うとぢたれば。朝戸出たのもしくて起きたり。朝日かやまてほい失ふ。只いづれともま

らで人のがり行きてんと出づる頃。夕立よあうてぬれたり。明日の若なつみよとおもひて。曉の頃かこへ行さしよ。月のかげかとおもふまかりよふりつみたる。なをふりての

ち空うち眺めて。空やちかきなどいひあふも。心の外なればこそ。いかづちさらふもの。とくよりしるといふめれど。夕つがたなりはためきてのちよ。さればこそけさより心ち

あしかりけれといへど。いかづちさるらざりけらし。さるよ今年消息の。雪深からん。雨天明なからんなど。空よりせうそ消息来しやうよいふの淺まし。あめあきらかなる五のとし。ま

さらざの半よまるといふめ

関の秋風終

今泉定衆 兩先生校正
富山健

御伽草子

一名御伽文庫
定價金三拾錢 郵送料金四錢
美製本 全一冊
紙數五百五十餘頁

本書目次

- 文正草子
- 御曹子鳥渡
- 七草草子
- さゞれ石
- 廿四孝
- 猫の草子
- 一寸法師
- 酒顛童子
- 鉢かつぎ
- 唐茶草子
- 猿源氏草子
- 蛤の草子
- 梵天國
- 濱出草子
- さかさ
- 横笛草子
- 小町草子
- 小幡さつね
- 物草太郎
- 子敷盛
- 乃せさる草子
- 和泉式部
- 浦島太郎

本書は既に世人の知る如く室町時代の前後にいたる草子類を集めたるものなりをべ
て三篇何れも奇詠珍談のみ故に其の快味の普通の小説に勝る事速く文章はた優麗
して一種の體をなせり然れども從來刊行のもの至りて少く且假字のみ多くして讀む
易からずこれ誠を惜しむべき事なり弊舖こゝに見る所あり今泉富山兩先生の校正
を請ひて普くこれを世に公しをるを得たり大方の諸君願くは一本を購ひて平日の齋
散を併せてこの言の蘊をらざるを知ら給へ讀みて白す

明治廿四年四月二日印刷
同 年四月六日出版

版權所有

校訂者 編輯者 今泉定衆

東京小石川區西江戸川町一番地

同 富山健

同 牛込區榮土八幡町二十三番地

同 發行所 吉川半七

同 京橋區南傳馬町一丁目十二番地

同 關西大 費所 松村九兵衛

大阪南區心齋橋南一丁目

同 發賣人 林平治郎

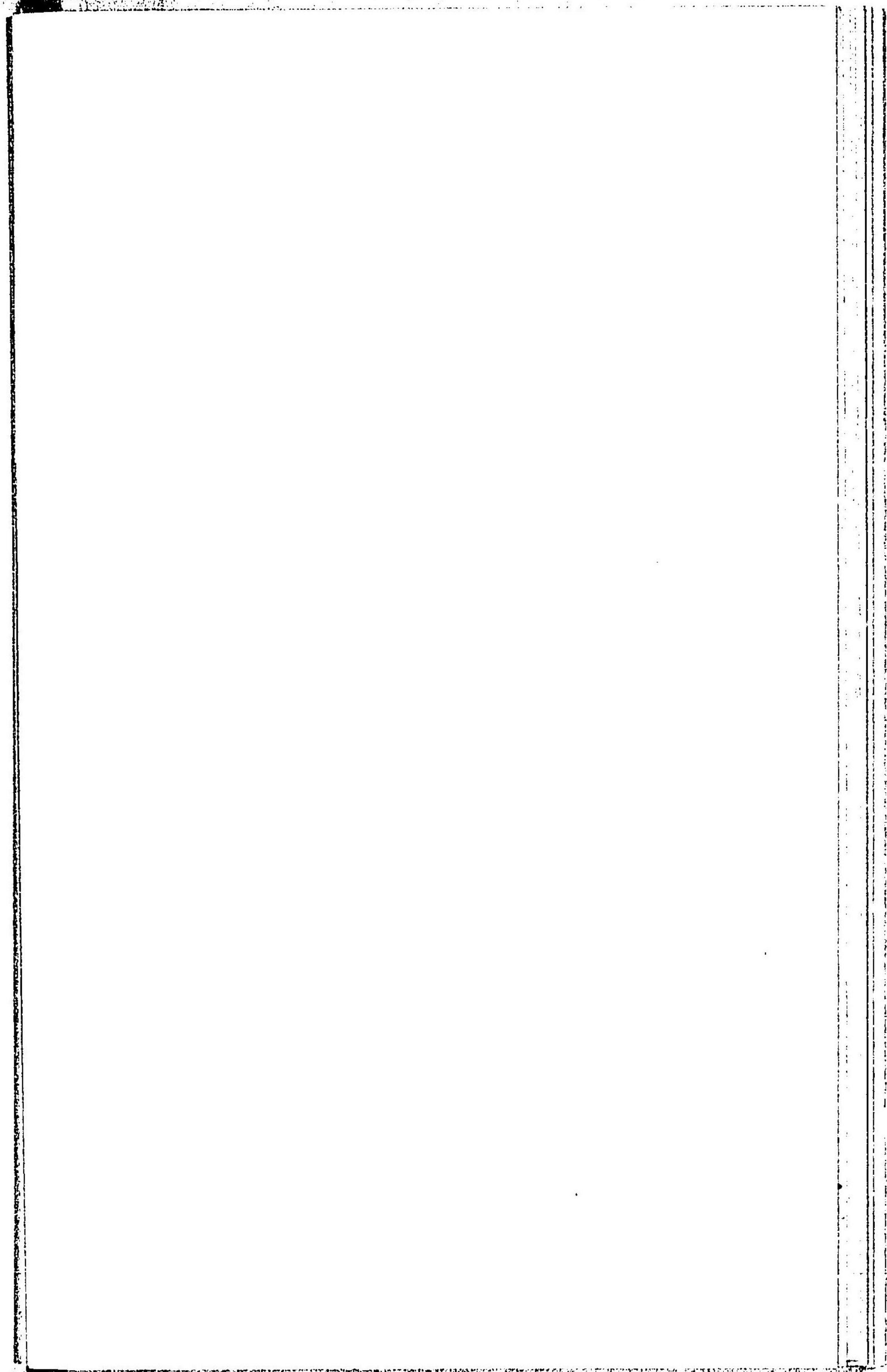
東京日本橋區箱屋町八番地

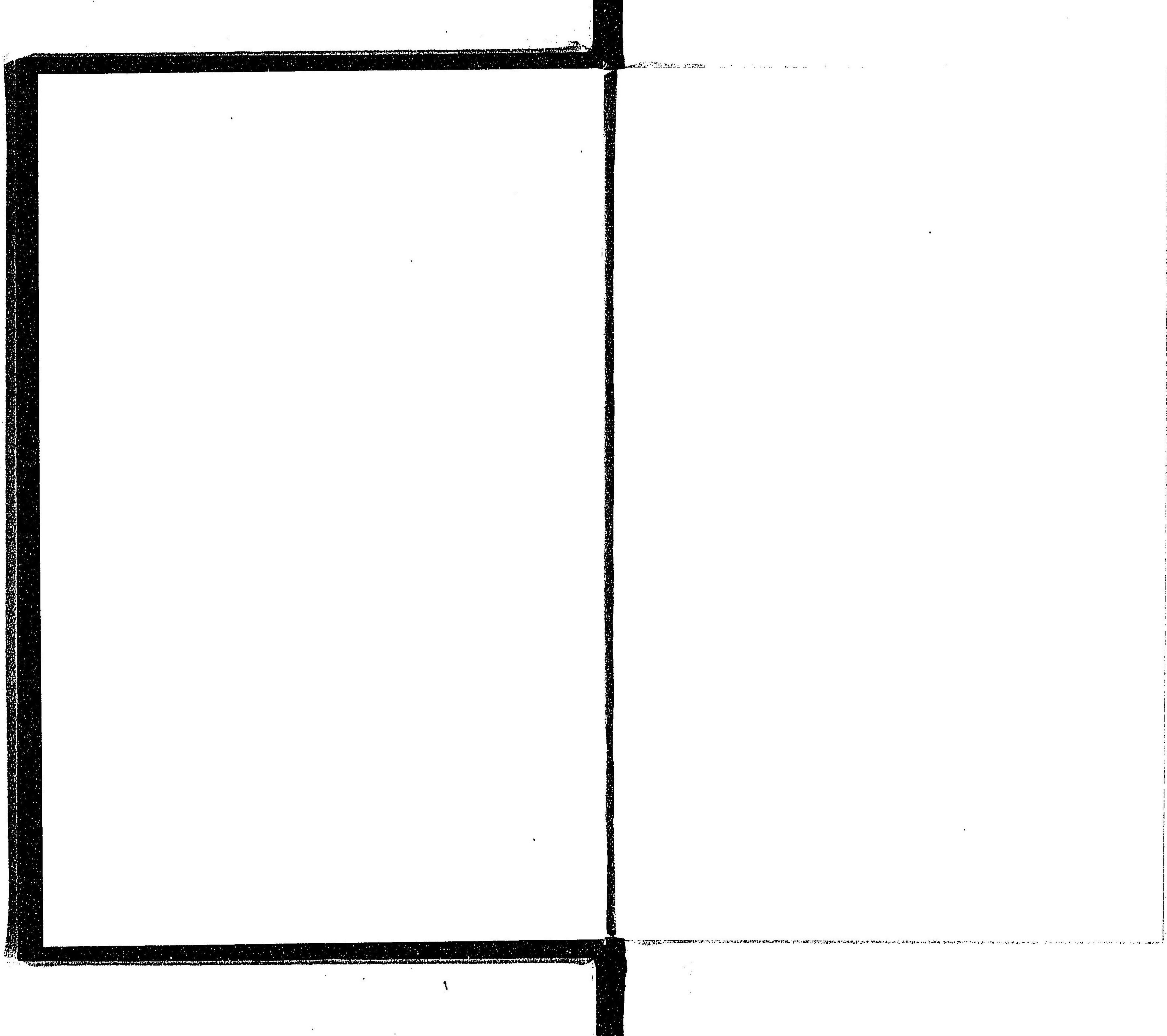
同 印刷所 必昇社

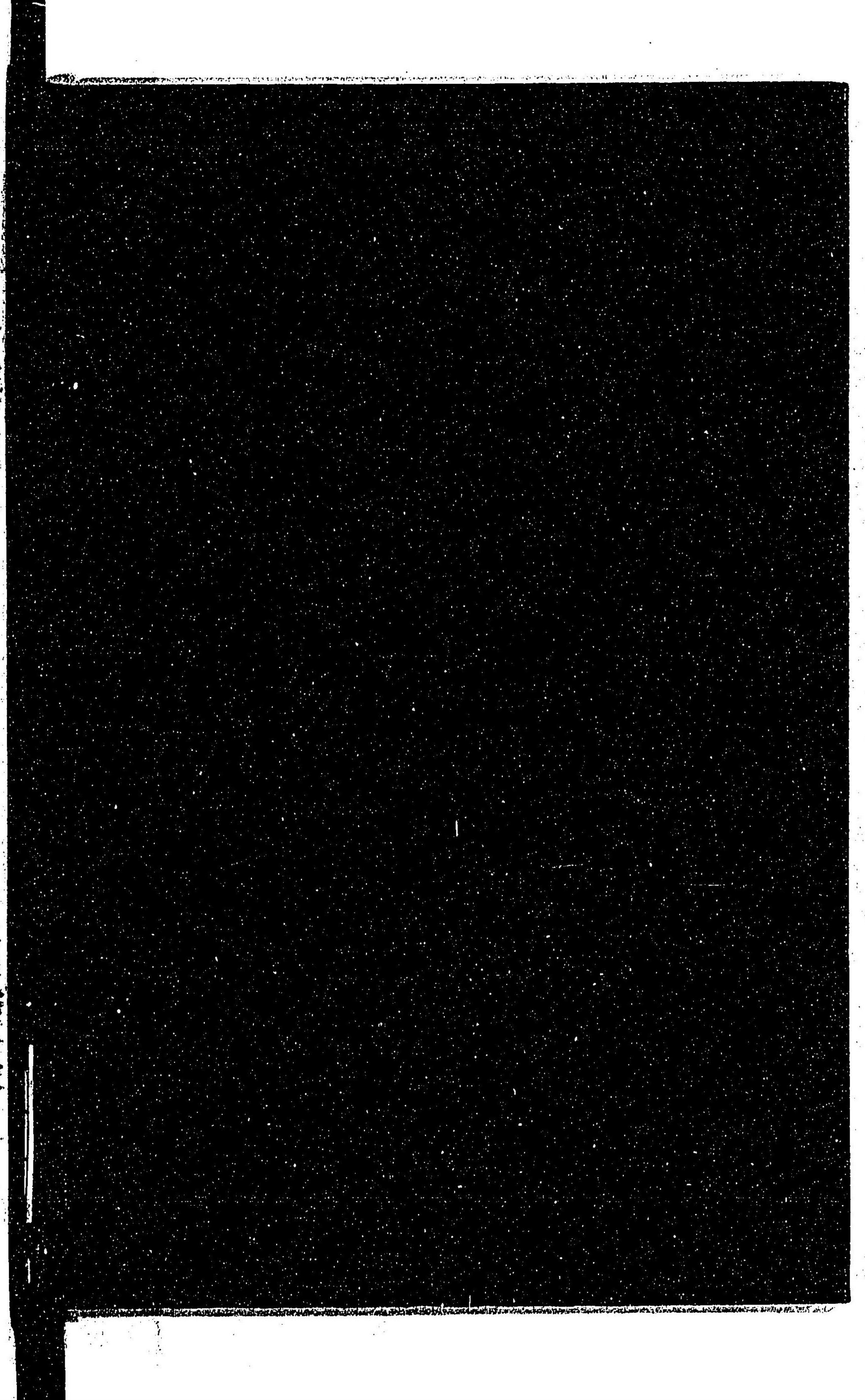
東京々橋區館屋町九番地

各府縣發賣所

同	同	同	同	新	石	同	同	愛	波	飛	佐	神	熊	同	京	同	同	同	大	同	同	同	東
加	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
茂	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
平	平	平	平	市	澤	川	通	丁	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町	町
丸	上	目	西	林	近	三	勝	川	三	村	河	熊	長	大	便	嵩	三	柳	梅	中	良	東	北
山	山	田	田	村	田	原	見	瀨	浦	屋	谷	谷	崎	黑	利	山	水	原	原	西	明	善	善
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
八	平	郎	平	吉	平	藏	助	助	助	衛	助	堂	郎	鋪	堂	堂	助	衛	七	太	堂	堂	店
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
佐	千	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
倉	倉	金	原	河	岡	浦	市	泉	市	泉	市	泉	市	泉	市	泉	市	泉	市	泉	市	泉	市
村	多	多	朝	高	高	間	川	正	登	石	魁	本	五	便	正	高	金	煥	五	小	水	西	樋
山	田	田	野	木	木	野	原	又	間	間	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
書	支	本	兵	正	清	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
房	店	店	衛	堂	助	門	藏	堂	太	藏	社	助	門	堂	堂	店	堂	堂	堂	次	堂	郎	門







914.5
H997
I

